婦人衛生雜誌

大正八年七月二十日發行

第三百四十八號

婦人衛生雜誌

第三百四十八號目次

謹告

來る八月及び九月の例會は本會規則に依り
例年の通り休會致候也
暑中特に會員諸姉の健康を祈る

大正八年七月

私立大日本婦人衛生會

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや知識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんことを憚ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んことはいと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつぱら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相繼て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を出さゞるもの丶如くまことに口惜しきことなり因て頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演説談話を乞ひ互に相研究し尚之を筆記して册子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす玆に本會旨趣の梗概を敘べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其贊成を仰ふぐこととしかり

明治二十年十一月　　首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要

（明治三十二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の知識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり

●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く

●第三條　本會の會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得

●第四條　入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す。入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし

●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金貳拾五圓以上特別會員は一ヶ月金參拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす

●第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを認めたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし

●第七條　會員は本會に於て發刊する雜誌を無料にて受ることを得

●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず

●第九條　本會に推薦員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の妃殿下に願出るものとす

●第十條　本會に左の役員を置く會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名

●第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命す但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし

●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記錄雜務を掌る幹事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす

●第十三條　臨時指名委員の件

●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす滿期再選することを得若し任期中缺員を生するときは次點者を以て補缺す

●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す

●第十六條　集會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め園遊會を開くことあるべし

●第十七條　毎會學識經驗ある人々に衛生上の講義演說談話を囑托し會員をして隨意聽講せしむるものとす

●第十八條　會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會會場に誘致し講義演說等を傍聽せしむることを得（但衣服は總て質素たるべきこと）

●第十九條　講義演說等は男子の傍聽を禁す

●第二十條　規則の改正其他重要の件議定のこと

●第二十一條　毎年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし

●第二十二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす

●第二十三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事の檢印を要するものとす

●第二十四條　會計は一ヶ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會

●二十五條　地方に於て本會會員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得

●第二十六條　本會會員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會會員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす

●第二十七條　支會には支會限りの會員を置くことを得

●第二十八條　本會の雜誌は支會に回送すべきを以て其實況を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同じ

●第二十九條　支會は集會の都度其状況を本會に報告すべし

雜件

●第三十條　本會は隔月一回雜誌を發刊し之を會員に配附すべし

●第三十一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは書籍物品等を本會に寄贈する者ある時は本會會長の名を以て謝状を贈り寄贈者の姓名及品目を簿冊に登錄し尚本會雜誌を以て報告すべし

●第三十二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送受として別に返信料を添へらるべし（郵券送一割增）

●第三十三條　會費は東京府下に限り毎月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所所在の郵便局（本郷區駒込千駄木町郵便取扱所宛）振出しあるべし

●第三十四條　會員中若し本會の障碍となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議員會の決議を經て除名し若しくは廣告することあるべし

東京市本郷區駒込千駄木町五十番地　私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌第三百四十八號
（大正八年七月二十日發行）



人類の再生と民族の盛衰

醫學博士　永井潛

一、時勢の順應と生命の保續

一千九百十九年は實に世界人類の再生と云ふべきである。七百萬の戰死者と五百萬の重傷者と三千億圓の戰費と一千五百六十七日の長時日とを傾け盡して、世界の人類は實に大惡戰し大苦鬪した。今や戰雲漸く其の影を收め、世界の地圖其の色を改めんとすると共に世界の心も亦將さに新たならんとして居る。此の曠古の際會に於て徐ろに民族の興亡盛衰を生物學的に觀察する、亦一種の感興なき能はずである。

抑々生物界を見ると、生命の流れは古往今來滔々として絕えることはないのであるが、併し之を個々の生物に就いて觀察して見ると、決して永久的のものではない。恰も花開き、花散り、實を結ぶ、實が落ちて、極まり已む時がない樣に、人は生れ、人は死し世々代々之を繰り返して窮まる所を知らない。例へば大きな流れに浮ぶ泡が、かつ消えかつ結びて已む時がないのと能く似通つて居る。今斯かる立場より一民族を觀察して見ると、是れ亦然りであつて、どんな力の强かつた民族でも、時といふ魔力の爲めに、何時かは其の勢力を失ふ者である。夫の咲く花の匂ふが如く非常な榮華を誇つた希臘、羅馬、或ひは古くはバビロニヤ、アッシリヤ、埃及、印度の如き、是等の民族の跡を辿つて見ると、何れも所謂且つ消え且つ結びて已む所を知らない泡の如き感じが致す

のである、國亡山河在　城春花木深　杜甫の名句はよく此の感慨を道破して居る、そこで社會學者或は生物學者の中には一民族或ひは少し意味が違ふが一國民といふものは、矢張り一個の有機體に等しいものであるといふ考へを懐いて居る人が尠くないのである。國家有機説なる者即ち之れである。此考によると、國家は一有機體と看做すべきものであつて、一個人が出生し、發育し、さうして死滅すべき運命を持つて居ると同じ樣に、矢張り一民族も亦必ず其最後の運命は滅亡である、墓であると云ふ考へが主張されて居るのである。

併しながら、之に付いては隨分又議論のあることであつて、果して一個の社會、一個の民族といふものを、一個の生活體と全然同一視すべきか否かといふことは、容易に決せらるべきものではない。今假りに一歩を讓つて、社會有機説を唱へる學者の言ふ如く、一民族は一個體と同じ運命を繰り返さなければならないものであるとした所で、生物が、自己が有して居る生命を、世々保存し擴張して行く上から考へて見ると、一民族、一國家といふものは、必ずしも滅亡すべきものではないとも言へるのである。

なぜかなれば、生命の流れが古往今來滔々として絶えることがないと等しきことを、一民族の上にも亦期待し得らるゝからである。然らば則ちなぜ生命の流れが絶えないかといふと、其生命を保つて居る者が時と所とに從つて能く適應し、能く順應して行くといふ結果に外ならぬのである。果して然らば一社會、一民族、一國家といふものも、其の時に應じ、其の所に從つて、宜しく之に順應して行く丈けの能力を具へて居るならば、或は永遠に其の生命を保つて行くことが出來るとも云へるのである。

二、諸民族興亡の理

今是等の理論的關係は姑く措いて、前に述べたやうに、一民族の歴史が我々に示す所を辿つて見ると即ち一民族は必ず一時榮える、併ながら其の最後の運命として必ず衰亡を招く者の如く見えるのであ

る。又尠くとも實際是迄現はれ來つた大民族の歷史は、皆之れを繰返して居るのである。果して然らば、何故に一民族が一時榮えて、さうして而かも終には其の勢力を維持することが出來なくて果敢なく滅亡に歸するものであるか、其の因つて來る所の原因を探つて、之によりて其滅亡を防ぎ、或は尠なくとも其滅亡の來たることを遲からしむることは、最も大切なる問題でなければならぬ。

殊に有史以來の大動亂を目擊し來つた今日の意味に於て、民族と民族との最も力強い、最も目醒ましい、最も意味ある大競爭の最後の幕を目前に控へつつある所の今日、殊に二千七百有餘年の間此の秀靈なる島帝國に立籠つて、立派な發達と誇るべき歷史とを有しつゝある所の我々大和民族が、此時、此の場合に當つて、斯くの如き問題に眼を向けるといふことは、非常に大切なることであり、又非常に興味を感じなければならぬ一大問題であらうと信ずるのである。

一體民族が衰亡するといふことを、是までの學者はどういふ風に考へて居つたかといふと、多くは、或る其國民の經濟的狀態といふやうな總て、無形的、形而上的方面にばかり眼を著けて、是等の事柄が頽廢せる結果、其民族は終に滅亡に歸したかの如く說明致して居るのである。是れは已むを得ぬことであつて、或は歷史家、或は哲學者、或は社會學者等が、是れまで主に是等の問題に付て手を附けて居つたからである。併しながら一面、一民族或は一國民の隆替盛衰は啻に其民族の有つて居る所の無形の財產、即ち其の形而上的方面例へば社會制度とか、或は道德的觀念であるとかいふことばかりで決定せらるべきものでは無論ないのである。

即ち一面から云へば其民族の體質、其の民族の抵抗力、其民族の元氣、即ち是等の身體物質と離るべからざる關係を持つて居る所の事柄も亦無論顧慮しなければならぬのである。

斯く考へて見ると、我々生物學或は醫學に從事し

て居る所の者も亦、此の民族の興亡てふ大問題を論ずべき充分なる資格を持つて居るのである。又此問題に向つて其の立場からして充分なる研究をしなければならぬ責任を感ずるのである。

三、民族隆興の主要二條件

元來一民族が榮えて行くといふことの爲めには、二つの條件が必要である。即ち一つは「トラジショナル、プログレッス」即ち傳說的進步であつて、一民族が世々代々、自己の努力に依つて得來つたものを、更に增補修飾して後代に傳へ、之れを繰返して行くことに依つて得らるゝ所の無形の財產である。換言すれば、其の民族の有して居る文明開化なるものが、夫れである。即ち其民族が如何なる歷史的發達を遂げて來つたか、如何なる制度、施設を施すことによつて其繁榮を企圖することが出來たか、凡て是等の方面に關する者であるのである。

併ながらもう一つの方面も亦、それに劣らざる價値あるものである。それは「バイオロジカル、プログレッス」、即ち生物學的進步である。其民族の體質從つて之に關係を持つて居る所の心身の稟賦稟性が頗る大切である。即ちこの二つが具はつて然る後始めて其民族は充分なる繁榮發達を實現することが出來るのである。若し其一つが缺けるといふと、その民族の發達は到底望むことが出來ないのである。如何に「トラジショナル、プログレッス」が進步しても、それに伴ふ「バイオロジカル、プログレッス」即ち體質方面が不足であつたならば、其運命期して俟つべきである、歷史は幾らも我々に其の事實を語つて居る。希臘が倒れたのもそれである。羅馬が滅びたのも亦それである。或は近隣の大帝國たる支那が振はないといふのも即ちそれである。それ等の例は遠く之を海外の歷史に求むるまでもないのであつて、我日本の歷史に於ても幾らも其例を見ることが出來る何故に藤原氏の政權は悉く荒くれ武士の手に移つたであらうか、何故に源氏が一擧して平氏の赤旗を悉く壇の浦に打沈めることが出來たであらうか、是

等は云はずして明らかである。併しながら一面には又如何に「バイオロジカル、プログレッス」が行はれて居ても、之に伴ふ所の「トラジショナル、プログレッス」即ち文明開化なるものがなかつたならば、到底其民族は其の腕を世界の舞臺の上に揮ふことは出來ないのである。今日の未開人の身體、彼等の持つて居る所の活き〳〵して居る所の元氣、艱苦に耐へ得る力を見ると、是は到底文明人が想像出來ないものであるが。併しながら彼等は悲しいかな其生物的身體的進歩と共に文明の方面を持つて居ない。そこで歷史家とか、或は社會學者とか、或は心理學者とか、總じて是等の形而上の關係に携つて居る所の者の研究しなければならぬ方面は、申すまでもなく「トラジショナル、プログレッス」の方面であつて之を充實し之を發展さして行くやうに努めなければならぬのである。又我々醫學或は生物學に從事致して居る者の立場から、民族の衰亡或は隆盛といふことを考ふるに當つては、必ず「バイオロジカル、プログレッス」方面に著目して、是が衰退しないやうに否益々立派になつて行くやうに努力しなければならぬのである。私は今日の意味に於て民族の衰亡といふことに付て述べるのであつて、即ち「バイオロジカル、プログレッス」がなぜ衰へるか、而して夫が如何に民族の興亡に重大なる關係を有するか、是等の點に就て述べようとして居る次第である。

四、民族盛衰の指針たる生產率

抑々或民族が其の生物學的意味に於て、身體的或は精神的能力が段々と惡くなるといふことを測るには、色々の方面から之に手を著けなければならぬのである。就中其の事を見るに當つて、最も大切なる、又最も一般に亙つて深い關係を持つて居る所の標準となることは、生產率といふことである。一民族が「バイオジカル」の意味に於て果して進んで居るか、或は退歩して居るかを知るに就いては、先づ以つて其の數の立場から見て、其の民族が如何に殖えつゝあるか減りつゝあるかといふことの統計をやる。或は數

の關係でなくして、其質の關係、即ち其體質はどうであるか、例へば役に立たない者がどれ丈けあるかといふやうな統計を取る。或は又色々人類學的の測定をやる、身長に對する胸圍の關係がどうであるとか、或は頭の形がどうであるとかいふやうな點に就いて出來る丈け正確なる統計を取るのである。是等の仕事中で一番廣く亙つて比較的精密な調査が出來、そうして此問題を解決するに都合の宜しい標準となることは、上に述べた第一の數の問題、即ち言葉を換へて云へば、此の民族がどの位の早さを以つてドシドシ殖えて行くかといふ問題である。此の殖えて行くといふのは、一面から云へば生れると云ふこと、即ち民族の生產率によつて之をトすることが出來る。生產率とは人口千人に就いて、年々どれだけ宛子供が生れるかといふ割合である。又他の一面に於ては民族が死ぬる割合即ち死亡率である。此の生れる割合と死ぬる割合との差違が、其民族の殖えて行く割合、即ち增殖率である。是れ即ち人口千に對する年年の人口增加の割合を示すもので、數の立場から一民族が如何なる生物的意義を持つて居るかといふことを決定する標準となるのであるが、就中生產率、即ち一民族の生產率は其の民族の生物學的の價値を定める上に於て、死亡率よりも、遙かに重大なる意味を持つて居るものである。

そこで生產率に就て、今歐羅巴各國の主なる文明國の有樣如何といふに、隨分憂ふべき狀態に在といふことが能く分るのである。今英吉利、佛蘭西、墺地利の主なる文明國の人口の有樣を、一八四一年から、一九一〇年の間、此各五年間の平均を取つた統計表に就いて見に、例へば英吉利の如きは一八四一年から一八四五年までの五年間の平均は三二・三であつたものが、漸次に增加して一八七一年――一八七五の五年間の平均で三五・五と云ふ最大値に達し、之より後の統計では、二四・四といふ少ない數になつて居る。然り而して生產率が絕頂を示して居る年乃ち

此一八七一―一八七五年あたりから、英吉利の社會的狀態が一變したのである。卽ち英吉利が丁度此の頃に於て、農業國から工業國に移り行つたのであつて、それから後は生產率は漸次に下つて居る。次に佛蘭西は非常に人口增殖の惡い、卽ち生產率の低い國であつて、一八四一年あたりから生產率は下つて行く一方であり、又其生產の絕對數も英吉利、獨逸等に比べれば遙かに少ないのである。卽ち一九一一年の統計に至つては、千人に付いて僅かに十八人と七分といふやうな憐むべき有樣である。獨逸はどうであるかといふと、獨逸は一八四一年――一八四五年から段々殖え、英國より五年遲れて一八七六――一八八〇年には三九・三といふ絕頂に達し、それから又下つて居る。墺地利はどうかといふと、是も一八七一年あたり、卽ち英吉利が下りかけた時を期として下つて居る。斯ういふ譯であつて、歐羅巴の諸文明國に於ては、尠なくとも五十年頃此のかた生產率は段々減つて行く一方である。唯除外例を示して居るのは、歐羅巴の中でも割合に未開國と云はれて居る露西亞の如き者で、まだ割合に生產率の下りかたが少ないのである。さりながら、露國の如きは同時に死亡率も亦非常に高くして、卽ち多く產んで又多く死なせて居る。卽ち其の繁殖狀態は未だ極めて原始的である。

五、我國の生產率現況如何

然らば我が日本帝國の生產率はどうであるかと云ふに明治七年より同四十一年に至るまでの間の每五年間の平均數を見ると、七年から十一年に至る五年の平均數が二五・三であるがそれ以後生產率は年を逐ふて段々に上つて三十二年から三十六年までの平均は三二・二又三十七年から四十一年までのは三二・五となつて居る。もつともこの最後の五年間の中には、日露戰爭があつて生產率を低くして居ることを顧慮せねばならぬのである。要するに吾が日本に於ては、まだ生產率が下がつて來ない。のみならず寧ろ今までの所では、明かに上りつゝあるといふこと

が出來る。此の點は、大に我大和民族の爲めに喜ばなければならぬのであつて、吾が日本民族は此の生物學的意味に於て未だ老衰して居ないで、今後充分に發展すべき勢力を内に具へて居るといふことが充分に看取せらるゝのである。

併ながら吾が帝國の將來は之を以て必ずしも安心は出來ない。なぜならば、歷史は繰り返す者であるからである。英吉利の如き、佛蘭西の如き、或は獨逸の如き、何れも或時期までは、生產率が段々と上つて來て、遂に極大の値に達し、夫れから段々下つたのである。經濟學者の云ふ所に據ると、吾が日本の社會狀態は英吉利等の夫れに比して丁度約半世紀遲れて居るといふことであるが、若しそれを事實としたならば吾が國に於ける現下の生產率の向上は、必ずや上り續けるのでなくして、近き將來に於て夫が絕頂に到達し、之を限界として丁度半世紀以前に於ける歐羅巴各國に於けると同じやうに、漸々降下すべき運命に陷る者ではなからうか。而して其絕頂は現英獨の六七十年前と等しく、現下の我邦に於て或は既に到達されてゐるのではなからうかといふことを想定しても、あながち杞憂ではない。

然り而して歐羅巴各國では、生產率は目下右の如く下りつゝあるが、併ながら一面彼等は、文明の力によつて充分なる衞生的施設を爲し、之によつて餘程其の死亡率を減少さすることが出來、之に依つて生產率の減退するのを償つて優に餘ある樣になつて居るのである。夫れ故に英吉利の如き、獨逸の如きは、上述の如く生產率が減退して來たにも拘はらず、生產率と死亡率との差によつて決定さるゝ人口增殖率といふものを調べて見ると現時も猶ほ餘り減じて居ないのである。然るに今吾が邦に於ける死亡率を考へて見ると、社會的及個人的衞生が未だ不充分である爲めか、近時に至るも猶ほ死亡率が減退しない。加之幼年及び青年の如き大切なる年齡階級に於ては、動もすれば却つて向上せんとする勢を示して居る。それであるから現下吾日本に於て縱令生產率

が殖えつゝあつても、夫れ丈けで決して安心は出來ない。若し生產率が絕頂まで上つて、それを限度として漸次に下行し、而して死亡率は依然として下らない或は却つて上るといふ風な時が來たならば、夫こそ我が民族の將來にとつて由々敷大問題である。吾々は今にして、生產率を減さない樣に又死亡率を少なくするに要する充分なる研究を行ひ、協力一致それを實行するに非ざれば、近き將來に於て必ず憐むべき狀態にならなければならぬといふことを充分覺悟して居なければならぬ。

六、生產率調査の統計的諸研究

然り而して生產率が減る場合に於ては、果して國民の如何なる階級に於て專ら之が起るかを考へる必要がある。若し其減ることが、好ましからざる素質を有する階級若しくは劣等の者に於てのみ起り、好ましき素質を有せる優等の階級には起らぬとしたならば、其の減少や寧ろ喜ぶべきである。之に反して若し良き階級に於て、專ら生產率が下るのであるならば、夫れこそ民族衞生上益〻憂ふべき社會現象である。今斯くの如き立場から歐羅巴各國に於ける生產率の減退を觀察して見ると、愈〻益〻憂へなければならぬ事實が現はれて居るのである。それはどういふことであるかと云ふに、是等文明國に於ける生產率減退は、主として優秀なる階級に位して居る者の間に見られ、下級に位して居る者の生產率が減らないのみならず、或は却つて向上しつゝあることである。勿論茲で上流下流と云ふのは單に財產位置等を云ふのではなくして、遺傳學上好ましき素質を有し隨つて一般に社會の上位に立てる人々を意味するのである。是等の關係を調べるには次の如き種々なる統計的研究がなされて居る。

第一には區劃法である。例へば倫敦、巴里の如き大都會の町を幾つかの區劃に分けて、大變貧乏な人の居る所、例へば東京で云ば芝の新網とかいふやうな甚だしい貧民と、それよりも少し良い階級の人の居る所、それから可なりの階級の者の居る所といふ

やうに、段々富の程度に從つて六級の區劃を設けて各區劃々々に於ける生產年齡期にある每千人の婦人の生產數を調べて見ると、段々富の上に位せる方丈け生產數が少ない。即ち貧しい低い階級の人の方が割合に子供を生むことが多いのである。

是と同じやうな成績が、次の硏究方法に依つても示されて居る。先年ドレスデンの萬國衞生博覽會に出された統計の中に、現在佛蘭西に於ける知名の人四百四十五人即ち夫人と共に總數八百九十人の知名の親から、幾人の子供が生れたかと云ふ調査があつたが、之れに據て見ると、其の子は僅かに五百七十五人しか出來て居ない。即ち兩親の數をすら補ふことの出來ない程の少數である。其の中美術家の親が少なくとも百八十八人に對して其の子供が百〇四人、文豪が少なくとも百六十六人に對して其の子供は百二十七人、政治家が二百二十二人に對して其の子は百九十三人、實業家が四十六人に對して其子は三十五人、將校が六十六人に對して子は五十四人、官吏が六十六人に對して五十一人といふやうな、關係が見られて居る。即ち親自身の數よりも子供の數が少ないといふやうな憐れなる統計が上つて來てゐるのである。

次に第三には相關法を應用せる硏究法である。次に示す例は、タピッド、ヘロンと云ふ人が相關法によつて倫敦に於て調べた結果である。元來相關法とは、或る一つの事柄と、他の事柄との統計を取つて此の兩者がどういふ風に相互の間に關係を持つて居るか、即ち若し一方が殖えれば他の方も殖えるか、或は之に反して一方が減れば他の方も減るか、或は一方が殖えて他の方が減るか、或は其の反對の事が起るか、凡て是等の關係を統計上から解決して行くのである。其際二つの事柄が、互に關係を保つて、一方が增す場合には他の方も增し、或は一方が減れば他の方もこれに伴つて減るといふ場合であるならば、之を(+)で表はすのである。例へば物を運ぶに人數が增せば運ばるゝ物の分量が增すといふ場合に於

ては相關の關係は(+)である。之に反して若し一方が殖えれば他の一方が減ると云ふ關係があるならば、其場合には(−)で表はすのである。例へば或る果物を挘るといふ場合に、挘る人が増せば増す程、木にある果物の數は愈〻減つて來るのである。即ち斯ういふ場合には一方が殖えれば他の一方が減るのであるから(−)で表はすのである。然り而して若し一方が二倍殖えれば他の一方も二倍殖えるならば其の相關の關係は(+)一・〇である。即ち相關は完全である。若し又一方が一丈け殖えるのに他の一方は、〇・五丈け減る場合であるならば、其の相關は(−)〇・五で、中等度の相關を保つて居ると唱へるのである。若し此の價が〇・一乃至〇・二五ならば輕度の相關ありといひ、〇・五乃至〇・七五ならば高度の相關ありと稱するのである。相關の方法は種々なる事柄を統計の立場から調べて其の物の間にどういふ關係を持つて居るかといふことを調べるに當りて非常に興味ある研究の仕方である。扠てこゝに考へなければならぬことは、必ずしも直ちに一方が他の方の直接の原因を爲すものであると云へない、唯或る事物と或る他の事物が互に關係して居るとは云へるのである。勿論その或場合には、兩者が因果關係を持つて居る場合もあらうが、必ずしもさうでない場合もある。例へば茲に二個の時計があると假定して、一方の時計の針が廻れば、他の一方の針も廻る、併ながら、此の兩個の時計の針の運動は、決して直接因果の關係を保つて動いて居るのではない、單に此の兩個の運動に密接な關係があるといふに過ぎない。

そこでヘロン氏は此の相關法に依つて、生産率と他の種々なる社會的現象との間に如何なる關係を保つかを調べて見た所が、職務に從事する男の數と出産率との相關は −0.78 となり、下婢を使用する婦人と出産率との相關は −0.8 となり、又十歳乃至十四歳の兒童勞働者の數と出産率との相關は +0.66 となり一室に二人以上住居する人の數と出産率との相關は +0.7 となる樣な成績が得られた。即ち一般に好まし

からざる階級が殖えれば、生産率は(+)の相關を保つて增加し、之に反して好ましき階級が增す場合には(−)の相關を保つて減少することを見た。例へば、職務に從事する男の數が殖えれば出産率は逆比例して(−)の相關で減つて來るといふ事實が分つた。元來浮浪の徒が減つて、一人前の仕事をする人が殖えるといふことは、好ましい階級が增すことで、喜ばしい出來事であるが、さうなれば却つて出産率が減るといふことになる。次に下婢を使用する百人の婦人に對する生産率の相關を調べて見ると是れ又著しく出産率が減るのである。下婢を使用する夫人が殖えるのは、社會に出て成功する上流階級の婦人が殖える譯で、此の意味から喜ぶべき社會現象であるが、其の際には、却つて出産率は減る。乃ち(−)の相關を示すのである。次に勞働に從事する者が殖えると(+)の相關を示して、出産率は又殖えるのである。卽ち社會の下層の人の方が生産率が比較的高く、上流の者は生産率が低いことの一方面の立證をすることが出來る。其他上の例に示されたる事實は何れも同樣に解釋することが出來る者である。

第四には直接に統計を取つて、如何なる者が如何に殖えるか或は減るか、就中好ましからざる劣等者の生産率が普通の生産率に比して大なるか、將た小なるか等の統計的事實も亦一方面の研究として價値あることは言ふ迄もない。今之に關して囚徒の數に關する亞米利加の統計を述べて見ると、合衆國では一八五〇年卽ち今より約そ六十年程前に、人口の總數が二千三百萬であるが、それに對して囚徒の數が六千七百三十七人であつた。それが一九〇四年卽ち僅かに五十年を經過した後には、總人口が八千萬人に上り、而して囚徒の數は實に十萬人に達して居るのである。此の如くして人口十萬に對する囚徒の數を調べて見ると、一八五〇年には僅かに二十九人であつたものが、一九〇四年には百二十五人といふやうな驚くべき數に上つて居るのである。卽ち僅か五十年の間に等しく人口十萬に對する囚徒の比較數は

四倍增加して居るのである。又殺人罪を犯した者は一八八五年から八九年まで五年間の平均數が人口百萬人に對して三十八人と五であつたのが、一九〇二年から、同六年までの平均數は、等しく人口百萬人に對して百十一人といふ數に上つて居るのである。此の如く何れも年代を逐ふに從つて、劣等者の數も著しく增して居る。而もその增し方たるや普通の人が增す割合よりも、遙かに大なる勢で增して居るのである。

それから又精神病などの統計に就いて見ても、同一の事が見つかる。例へば、英吉利に於ける統計に據ると、一八七六年から、一八九六年の二十二年間に、人口千人に就て、初めは、五•四人であつたものが、二十二年を經過せる後は、人口千人に就て、十一•六人と云ふ割合に高まつて居るのである。又蘇格蘭の統計に據ると、一八五八年以來、約五十年間に、總人口は五〇%しか高まつて居ないに反して、精神病者は、一九〇%も高まつてゐる。

七、憂ふべき劣等者の增殖

總べて斯くの如き關係から調べて見ると、普通人全體として殖えて行く割合よりも、劣等者の殖えて行く割合が、急劇であることがよく分るのである。して見ると、歐羅巴の文明諸國に於て、現在出產率が、下りつゝあるといふことと夫れ自身が、既に憂ふべき事であるのに、尙ほ其の內容に立入つて如何なる者が增して、如何なる者が、減つて居るかといふことを、仔細に檢べて見ると、尙ほ更其の憂ひを深くしなければならぬことになるのである。現在亞米利加にしても、或は獨逸にしても、所謂普通人よりも以下に位する劣等者の統計を取つて見ると、隨分數が多いのである。獨逸の統計に據ると、人口十萬に就て、精神病者或は、白痴と看做すべきものが四百人、癲癇者が百五十人、大酒をして、始終泥醉して居るやうな人間が二百人、盲者が三十人、其他不具の人が二百六十人、肺病患者、而もその末期にあるものが五百人といふやうな譯になつて居るのであ

つて、斯ういふ統計を取つて見ると、殆んど豫想外に多數の人に於て、其の體質が普通以下の値しか持つて居ないといふことになるのである。

吾が帝國に於ける、精神病者の統計に上れる數は、大正六年六月保健衞生調査會の報告によると、六萬四千九百四十一人である。併し、實數はこれよりも遙かに多く、呉博士の如きは、確かにこの二倍はあるだらうと云はれて居る。歐米各國では、人口千人に就き、精神病患者が二人乃至三人あることになつて居る。次に獨逸に於ける、學校の兒童の統計を取つて見ても、其の三分の一は多少低能兒、若しくは、劣等兒であるといふ統計も現はれて居るのである。又一面亞米利加の統計を見ても、千九百十一年の統計によると精神病者が二十萬人、盲者十萬人、聾啞者が十萬人、感化院に居る者も十萬人、浮浪者十萬人、少年犯罪者が二萬三千人、其他所々の救護所の厄介になつて居る者が二百萬人で、全體では、合衆國内にある劣等者の數は、三百萬人に上ると云ふ驚くべき事實がある。さう云ふ譯で、諸文明國に於て現に生産率が減りつゝあると云へども、而かも質の惡い者は左程減らず、或は寧ろ殖えて行きつゝあると云ふ事實を認むるのであるから、民族衞生上此の問題が、愈々益々重要なる意義を有つことになつて來るのである。

然らば、なぜ文明が進めば人口増殖の上に、上述の如き好ましからざる結果が、それに伴つて起つて來るであらうか、夫れには色々複雜なる原因はあるのであらうが、兎に角その一つの、大切なる原因を爲すべきことは、文明が進んで來るに從つて、生存競爭が劇しくなり、其の結果として結婚が頗る困難になる、隨つて晩婚をする者が多くなる。殊に晩婚をする者は、上に立つ優秀なる階級である。何となれば、優秀なる者は、競爭場裡に立つて、愈々優者たらんとして、努力することも大であり、從つて晩婚によつて、負擔を輕くせんとするからである。而して晩婚をすれば、其結果子供の生れるのが少なくな

るは勿論である。我が日本に於ても、段々と其の風潮を示して居るのである。例へば、統計の示す所を見るに、男子が二十五歲から三十歲迄の階級で結婚する者は三十二年には、結婚者百に對して、三七・二八であつたが此の若い年齢階級で結婚する者は、年を逐ふて、段々に少なくなつて來て、明治四十四年には、三一・七に落ちて居る。之れに反して、三十歲から、三十五歲までの年齢階級で結婚する者は、明治三十二年乃至三十五年頃迄は、結婚者百に對し、僅々一二前後であつたものが、年を逐ふて、漸次上り來り、明治四十四年には、一五・二八になつて居る。女に於ても亦男と同樣な關係を、統計上に明示することが出來る、殊に二十五歲から三十歲といふ年齢階級の女子の晚婚は、年と共に段々增して來て居るのである。

八、結婚年齢と生產の關係

次に結婚時の年齢と子供の生れる數の割合も亦民族の數の衛生上頗る注目すべき價値あるものである。云ふ迄もなく、晚く結婚すればする程割合に產兒數が少なくなる。ヴエスターガルト及びルーチン氏の統計的研究によれば男子が二十五歲以下の年齢に於て結婚した所の一夫婦からは三・五といふ人數の子供が生れる。二十五歲から二十九歲の年齢階級に於て結婚した一夫婦からは三・二五。三十歲から三十四歲までは三・二。三十五歲から四十四歲の間は、二・二八。四十五歲から五十歲までは一・一〇といふ樣に晚婚するにつれて產兒數が下つてゐる。吾が日本人の身體が完全に成熟を終るのは男子二十五歲、女子十九歲頃と見てよいから、此の年齢を以て最も適切なる婚期とすべきであるが、吾邦の統計によれば、實際產兒數も亦この婚期を以て最大で、夫れから遲くなる程產兒數は少くなる。次の表は其の關係を示すものである。

婚期	平均產兒數
二〇歲以下	五・〇
二〇—二五	五・四三

男子	二五—三〇	四・九五
	三五—四〇	四・三六
	四〇以上	三・七八
女子	二〇歲以下	五・〇三
	二〇—二五	四・八〇
	二五—三〇	四・四七
	三〇以上	三・四三

此の點から見ると晩婚は生産率を減少するものであるといふことが云へるのである。

ジョンソン氏の統計に依ると、合衆國の女子の總數の九〇%は四十歲前に結婚するが、女子で大學を卒業した者では、四十歲前に結婚する者は四五%に過ぎぬ。又キャスル氏の言ふ所に依ればハーバート大學卒業生の産兒數は平均3/4人、ヴァサア大學卒業生のは1/2人にしか達せぬ。

九、生産率低減の諸因

斯く文明になればなる程、生産率が低くなり、而して其の場合には下級の方よりも寧ろ上流の階級に於て生産率が減つて來るといふことは、實に民族衞生上の大問題である。一體どの位の生産率があれば、一民族が數の上に於て、自分の勢力を扶植して行くことが出來るかと云ふと、尠なくとも、一夫婦より三人、或はそれ以上の子供を育てなければならぬ。二人の夫婦から二人生れたといふのでは、完全に育つ前に死ぬ場合もあるから、夫婦自分の數さへも補ふことも出來ないのである。尠くとも三人以上の子供を産まなければ數の上に於て勢力を維持して行くことが出來ないのである。ファールベック氏の計算に依ると、二人しか子供を育てないといふ所謂二兒制度なる者が跋扈すると、餘程都合のいゝ場合でも、七十七年目には其の民族の人口は半減するといふことである。其點から云ふと、現在の歐羅巴の上流に於ける生産率の減退は頗る寒心すべき狀態と云ふべきである。

それから民族が段々文明になつて行くと、生産率が低くなるといふ第二の原因は、文明が進んで來る

と富貴なる者はあらゆる欲望を充たして享樂を恣にし、贅澤を盡す樣になる。而して是れ亦其の生殖力を衰へさす大なる原因と看做されて居る。此の事は動物などに於ても、其の類例を見出すことが出來るのであつて、野生の間は動物は非常によく殖えるものでも、其の動物を家畜として充分なる食物をやり充分之を保護し安逸に生活せしめると、却つて其の生産する數が減つて來るのである。

其れから第三の大切なる原因をなす者は、自分勝手に生産を制限すること、卽ち避妊なる者の流行である。是れも文明が進んで行けば行く程、愈々益々それが深く廣く實施される傾向がある。佛蘭西の如きは二人以上子供を作らないといふ上述の二兒制度なる者が、餘程廣がつて居り、獨逸を始め他の諸國にも、之れが豪い勢力で蔓延せんとしつゝあるのである。所謂自覺せる女新らしい女と云ふ者の如きは、何だか子供が餘計あることを却つて恥づる樣な觀念を抱いて居る有樣である。之を寶を示せと言はれて自分の子供を差出したと言はれる昔の賢婦人に較べると殆ど隔世の感がある。是畢竟一面から云へば、享樂主義の禍であり、一面から云へば生存競爭の激浪がこの尊き天職を奪ひ去る結果である。

次に第四の原因として擧ぐべきは、花柳病の蔓延である。是等は何れも凡てが相互に錯綜して其の因果の關係を爲して居るのであつて、文明が進む、生存競爭が激しくなる、已むを得ず晩婚になる、從つて花柳病が蔓延するといふ樣な順序になる。

花柳病に就ては隨分述ぶべきことが多いが、今は其の大要丈けで止めて置く。元來花柳病なる者は、其の病毒が直接生殖器を侵す點に於て、民族衞生上大切なる意味を持つて居るのみならず、其の感染力の强烈にして全身を侵害し、且つ其の病毒が子供に迄影響を及ぼす點に於て、民族衞生上に最も恐るべき敵である。

一〇、民族衞生と花柳病の脅威

曾て佛蘭西の有名なる花柳病學者なるフールニエ

ーといふ人が、男四千人、女四百人、合計四千四百人の花柳病患者に就いて、種々有益なる統計を取つてゐるのであるが、之に據ると、四千四百人中の千六百五十二人即ち三分の一强は、此の病毒が身體活動の中樞たる腦脊髓を侵して、生きて生き甲斐なき憐むべき狀態に陷つたのである。抑〻花柳病が一旦體內に侵入するや、一時潛伏して居つて、第三期と稱する時期に達すると、色々な所に其の病毒が行き渡り、害毒を逞ふするのである。其の第三期に於て、腦髓或は脊髓といふ我々の身體の大切なる機關を侵すことが、殆んど總患者の三分の一以上に起るのである。それからフールニエー氏の調べでは、四千四百人中生殖器の病を惹起する者が二百七十一人。骨の病氣を起した者が五百十九人。眼の病氣となりて現はれるものが百十人といふやうな、恐しい關係を持つて居るのである。殊にフールニエー氏が第三期黴毒で腦脊髓を侵したる者に就て、それがどういふ經過をとるかといふことを、上述の四千四百人に就て精密なる統計的調査を行つて報告した處に據ると、二十二%は治つたけれども、殘りの三十八%は死ぬるか、然らずば生きてゐても全く役に立たない社會の廢物になつて居るのである。

其れから又た花柳病に罹つても直ちに死ぬることは比較的尠ない者である。さうして割合長く生き存らへて居て、其の間に其の病氣が子供に遺傳する。或は他人にそれが感染する。そういふ點に於て、非常に恐るべき害毒を民族衞生の上に及ぼすものである。又た其の害毒は啻に身體上のみならず、精神の機能をも甚だしく侵害するものである。精神病を造る左右の手は Civilization（文明）と Syphilization（黴毒）とであると言はれて居る通り、精神病の大多數には、何れも黴毒が其の後に隱れて居る。黴毒は又一個人に止らず、其の妻に其の子に感染して、爲めに一家の物質的精神的結合の上に著しき動搖を來し、社會生活の單位なる一家の破滅をも持來たすのである。フールニエー氏が研究した所に依ると、

千人の黴毒患者の婦人の中、其の二〇%即ち五分の一は、結婚せる婦人であつた。即ち其の婦人の黴毒は全く夫より感染したものであることが確められて居るのである。之れによつて見れば、婦人が黴毒に傳染することは、勿論賣笑婦のみに限らない。可なり多くの家庭の夫人にも夫れが夫の不品行から侵入する悲惨なる葬られたる迫害がある。又た黴毒が民族を腐敗せしむる上に於て重要なる事柄は、黴毒が全身に行き渡り、色々重要なる器官を侵して其の機能を障碍せしめる時期即ち第三期に達するのは、隨分長い年月を經ることである。フールニエー氏の研究によると、第三期黴毒が其の頭を擡ぐる時期は、黴毒患者の四十九%に於て、黴毒感染後十年を經て始めて其所に至るといふことである。是れ所謂眞綿で首を絞める樣なもので、唯生き存らへると云ふ上から云へば非常に慢性的であるから宜い樣なものであるが、民族衞生上から見れば夫れが頗る危險である。なぜかなれば若し感染して短かい時間の後に色色な方面に害毒が暴露するならば、其人が短い時間の後に死ぬか、然らざれば役に立たぬ樣になつて仕舞ふから、社會衞生上よく其の害毒の蔓延を防ぎ得るのである。併ながら感染した其當座は何んでもないやうに見え又自分でも治つて居ると思つて結婚する。子供を産む。さうして一家を支へて一番大切な活動時期になつて、曩に侵入せし病毒が一時にその暴威を逞ふするといふことになるのであるから、非常に困つた結果を惹起するのである。此の如くして、單に自分自身に病毒を受くるのみならず、其妻子に向つて多大の不利益を持ち來すのである。所謂先天性の黴毒となつて其れが子孫に傳つて來るのである。斯て民族衞生上花柳病は最も恐るべく憎むべき者の一となるのである。尚一言附加すべきことは、誰でも黴毒が遺傳するといふことを普通唱へて居るが、これは間違ひである。黴毒そのものは決して遺傳するのではなく、先天性の黴毒は決して遺傳黴毒と言ふべきものでなくして傳染黴毒である。即ち胎

兒が胎內に居る間に黴毒に感染するのである。此の傳染の力はどういふ具合になつて居るかといふことを硏究されたる所に依ると、先づ第一代、第二代、殊に第二代に於て非常な勢ひで出て來るのである。例へば流產をやるとか、早產をやるとか、死產をやるとかいふ關係、或は然らずんば、其の子孫は生れながらにして骨とか、皮膚とか、或は齒であるとか、色々な所に黴毒の影響を受けて、異常なる憐むべき狀態で生れ來るのである。さう云ふ事柄は、第二代目に非常に著しい、第三代目からして段々毒力が弱つて來るのである。斯樣な關係から、黴毒は、啻に生產力を減弱せしむるのみならず、それよりももつと廣い、もつと深い立場からして、民族衞生上に非常な害毒を流すものである。

一一、授乳嫌忌と避妊

尙又茲に考へねばならぬ重要なる問題は、授乳の問題である。授乳するといふ事が、文明が進む程少くなる。日本の如きも是れ迄は、子供に乳を飮すといふことが、よく行き渡つて居たけれ共、文化が進むにつれて段々と新しい女といふ樣なものが出來て、虛榮心を滿足すべくそれを嫌ふ傾向が殖えて來る。ブンゲと云ふ有名な醫化學者は、文明が進めば酒精の濫用が行はれ、其他種々なる關係から、授乳力が衰退すると述べて居るが、多數の學者の調査によると、實際は授乳能力が衰退するのではなくして、乳腺の分泌能力は保存されてあるが、唯婦人が授乳を厭ひ之を與へぬ爲に、漸次乳汁が分泌されなくなるのである。所謂乳腺の練習が不足する結果であることが分かつた。元來授乳をするといふことは、健全な子供を育て上る點に於て大切であることは云ふ迄もないが、尙ほ其の他にも重要なる任務を持つて居るのである。といふのは授乳をせねば子供が早く生れる、唯數の上から云へば子供がズン〳〵生れれば其量を殖すやうであるが、强健な子供を生むといふ上からいふと、餘り頻繁に出產することは人種衞生上不利益である。少くとも二年或は三年位の間

を置いて產まなれけば充分身體の健康なる子供を產むことが出來ないのである。この立場から云つても、授乳することは非常に都合が好いのである。云ふ迄もなく乳を與へて居る間は、次の懷妊との間隔が長くなり、之に反して授乳を止めると早く次の兒が出來るのである。早く次が出來ると云ふことは、立派な體格の民族を造るといふ上から云ふと憂ふべきことである。斯く乳をやるといふことは、其の子供を健康にし、其發育を良くする上に非常な利益があるのみならず、尙その上に出產と出產との間隔を適當に保つて、健康なる體質を持つて居る子供を造る上に大切なる意味を持つて居るのである。

それから玆に尙ほ一つ申して置かなければならぬ事柄がある。避妊が行はれることに依つて出產率が減ることは云ふまでもないが、單に生產率を減らすといふことの外に、尙ほ民族の衞生上、非常な不利益を持ち來すことになる。なぜかといふと、英吉利の有名な人種衞生學者ペヤソン氏が統計的研究の上から結論した所に據ると、所謂「惣領の甚六」の諺の示す如く長男或は第二番目に生れた子供は、第三番目、或は夫れ以後の子供に比べて、身心共に劣つて居るといふ統計を擧げてゐるのである。

此ペヤソン氏の報告に付いては、大分異論もあるのであるが、併しながら兎に角昔からの諺の如く、餘程其の點には顧慮しなければならぬ。然るに今述べたやうに避妊をしたり、或は日本などでも或地方に於ては隨分盛に行はれて居たやうに、生れた子供を直ぐ殺すやうな場合に於て、始めの子供は誰れでも殺さないで、後から產れるのを『間引く』のであるから、惡い方を殘して置いて、却つて心身共に强健なるべき者が避妊によつて生れないか、或は生れても殺されて、却て次に述べんとする逆淘汰を行ふことになるから、是れ亦民族の心身を强健に保つて行く上に於て非常な損害を來たすことになるのである。

以上述べた處は、主として民族の數の發展に於て、不利益を持ち來たすべき主なる關係であつたのであ

るが、是れより更に進んで、質の關係に移り行き、文明が進めば何故に心身共に薄弱になつて來て、所謂泥土に委して顧る人なき様な哀れなる結果を見なければならぬかといふことを少しく考へて見たい。

由來文明が進めば生存競爭が盛になり「セレクション」即ち淘汰作用なる者が、生物の進化を促す處の大切なる事項であることは言ふ迄もない。さりながら文明が進めば進む程、其の淘汰が屢々反對の意味に於て行はれることになる。即ち「コントラセレクション」逆淘汰なることが起つて來る。淘汰作用の本來の意義は、適者生存優勝劣敗にある。是れ實に淘汰が生物進化に貢獻する所以である。然るに文化が進むと往々にして不適者生存劣勝優敗と云ふ冠履顛倒の事柄が知らず識らず行はれることになる。而して是れ實に「コントラセレクション」であつて進化に反して退化を齎らす者である。

一二、自然に反抗する「逆淘汰」

元來人間なる者は大自然を自分の掌中に支配せんとする野心を包藏して居り、而して或程度迄現實にする。是れ即ち文化である。即ち或意味に於て、人間は實に自然に對する反抗兒である、非常な我儘者である。自然が左せんとすれば、人間は右せんと欲する。自然が『死せよ』と命ずれば人は『否な我は活きんと欲す』と叫ぶ。これ即ち一面からいへば人間の偉大なる點であるが、さりながら一面から云へば、人間はこの我儘勝手の振舞に依つて自ら愚かなることを成して覺らずに居ることが幾らもある。玆に云はんとする「逆淘汰」なるものも亦其一例である。而して此の逆淘汰なるものが、文明が進めば進む程烈しく行はれて、その結果生物學的に民族の數をして少なからしめ質をして惡からしむるに重大なる原因となるのである。

逆淘汰の中最も重大なる意味を持つて居るものは近代の戰爭である。昔より今に至るまで戰爭を以つて最も合理的の淘汰作用と看做し、之を尊重する人が多くあつた。ヘラクリットは『戰爭は凡ての母であ

るゝと唱へた。カントの如き平和論者でさへ『人間は平和を欲する。併しながら自然はより慧きことを知つて居る。彼は戰鬪を欲する』といつて、戰爭に贊詞を捧げて居る。成る程、戰爭が昔の有様で行はれるのであると、或る意味に於て合理的淘汰に協つたかも知れぬ、併し近代の文明各國に於て行はれる所の者は、卽ち人と人との戰爭といふよりも寧ろ智慧と智慧との戰爭、機械と機械との戰爭といふことになると、其作用たるや、淘汰といふよりも寧ろ屢々大なる逆淘汰となつて來る。卽ち却つて惡い者が保護され生き殘つて、良い者が死に絶えるといふ結果に陷るのである。

精鋭無比の殺人機械と殺人機械との戰爭のために如何に多大の生命が犧牲に供せられるであらうか、三千五百萬人を動員し七百萬人を斃した曠古の大戰亂が、其の血腥き幕をおろした許りの今日、敢て過去に遡つて其の調査をする必要もないが、試みに之に關する一二の統計を求めて見るのも亦徒勞ではあるまい。

ナポレオンは居常『自分は年々十五萬人の歳入を持つて居る』と豪語して居たさうであるが、實際ナポレオンが歐洲を蹂躙した爲めに、三百七十萬の生命を失つて居るのである。又クリミヤ戰爭に七十五萬人の人が死んで居るのである。又普佛戰爭に於て二十一萬人、近くは日露戰爭に於て五十五萬人といふやうな譯である。ラプージユと云ふ佛蘭西の統計學者の計算に據ると、千八百十五年以來今爾の大戰爭が起るまでの一世紀間に、戰爭の爲めに歐羅巴各國で人の殺された數は前後を通じて二千一百萬人の多きに達して居るのである。そこで戰爭に依つて人を殺す場合に若し惡い者が斃れて良い者が殘るといふのであるならば、悲慘なる戰爭も民族衞生上からすれば其の意味に於ては大いに喜ばなければならぬのである。併ながら近代戰爭は丁度其れと正反對の結果を齎らすもので、寧ろ良い者が死んで惡い者が殘るといふ結果になつて居るのであるから非常に强

烈なる逆淘汰である。といふのは、近代の戰爭に出る者は誰れであるかといふと、現代文明國の多くは、何れも全國皆兵主義卽ち徴兵令が布かれて居る、其の徴兵令に依つて、常備軍、豫備軍になる所の男子は、一國民中の最も優秀なる者であつて、實に其の民族の中心を作つて居るのである。殊に又其の人は民族の發展の上に於て最も重大なる意義を持つて居る所の「生殖作用」を盛んに行ふべき年齢期の人々である。さう云ふ人々が、所謂血税を拂つて、多數に徴發されて、非常に進歩せる殺人機械の下に一國民の中心核たる此の優良者は容赦なく犧牲に供せられてゐる。之に反して、其の國民の中で、體格の惡い爲めに徴兵檢査に不合格になつた者が殘り、此の恐るべき犧牲から保護される。さうして體質の良い者は生殖の仕事から、並びに一家の生産の上から引き離されて、軍務の爲めに一身をば犧牲に供せなければならぬ。然るに惡い體質の者は家に殘つて勝手に結婚をし、又自分の稼業に携つて、安樂に生殖をやることになるから、詰り體質の良い者の方が惡い者に較べて甚だしく損をする譯である。其の意味に於て、平時に於ても、一國民中の最も大切なる中核が徴發せらるゝといふことは、民族衞生の立場から非常な損失である。假りに今兩者を比較して、體質の惡い者の繁殖力が一・〇三で、良い方の繁殖力は一・〇の割合であつて、僅かに〇・〇三丈けの差を保つて一方が打勝つて居ると豫想する。僅かに二十三代半經てば、不良種子孫の方が良種の子孫の倍になるのである。徴兵令の爲めに優良者が血税を拂ふことがさう云ふ風に不利益であるのに、今一旦戰爭があると、之の爲めに、立派な體格を持つて居る所の一國民の中樞となる者が犧牲に供せらるゝといふことは愈々悲むべき結果になるのである。

一三、歐洲に於ける戰後の人口問題

今述べた樣に歐羅巴では、十九世紀の初めから其の終りまでの間に約二千百萬人程を戰場の露として居るといふことであるが、假りに此の二千百萬人が

結婚して、二人宛子供を作つたとすると、五代目には其の子孫の數が一億六千萬人といふ多數に逹するのである。僅か五代、人間の一代を平均三十年とすれば、百五十年の間には體質の良い者の子孫が一億六千萬人殖えて來る譯である。然るに戰爭の爲めに、其の良種の子孫は永久に、歐羅巴から失はれたものと云はなければならぬのである。斯く考へて見ると、七百萬人の戰死病死者と五百萬人の不具者とを出した今爾の大戰爭の結果はどうであらうか、我々は民族衞生の立場から充分にこれが結果を觀察しなければならぬ。歐羅巴の學者はこの大戰爭の始まる前に於てさへ、夙に人口問題の爲めに苦心して居たのである。卽ち如何にして生產率の減退を挽囘し國家に優良な體質を具ふる人民を殖やすことが出來るかと云ふことが一大問題とせられて居たのである。殊に佛蘭西の如きは、近代になつてから人口問題の必要なことに心附き、此點に付て寧ろ狼狽して居るやうな始末である。玆に於てか子供のない者には罰金を科して之を財源として、子供の有る者には保護金を與へるといふ樣な案を出して生育を奬勵しようとして居た譯である。然るに突如として今度の大戰亂が勃發して、一大反淘汰を行つた爲めに、貴ぶべき素質を持つた七百萬の人が永久に歐羅巴文明國から消え亡せることゝなつたのである。搗てゝ加へて生活は困難になる。男女の數の均衡は著しく破られる。彼等諸國は此の重大なる損失を今後どうして償ふであらうか。是れこそ非常な見物である。大戰爭の後には多方面に於て改良的仕事に著手せらるゝことゝ思ふが、就中、最も注目すべく又最も大切なる跡片付は恐らく此の人口問題であらうと吾輩は信じて居る。外國の新聞雜誌等に就いて見ても、戰爭中既に非常に此の問題に付て學者達は苦心して居たのである。現に近頃に獨逸第一流の衞生學者の泰斗たるグルーバー博士は、之れに關する意見を發表して居るが、其の云ふ所に依ると、若しも獨逸の人口問題を現在の狀態に放任して置いたならば、四十年の後に

は乾度現今の佛蘭西と同一の憐むべき有樣に沈むのであらふ。そこでこれを救濟するには、子なき者から税金を取りて子ある者を保護し、育兒を奬勵するより外はないと叫んで居る。

一四、醫術の進歩は種族全體に損である

自分は無論戰爭が有する大切なる意義を認める。又軍國主義の大切なる半面をも認むる者である。併しながら民族の永遠の發展といふ立場から云ふと戰爭は實に恐るべき逆淘汰作用であることを斷言する。勿論戰爭に依つて人間社會に潑剌たる淸新の氣が旺溢する、腐つたものが大風雨に曝露されることに依つて綺麗に洗ひ流さるゝ樣な痛快な出來事が起る。又戰爭は人間の力を試めす試金石であるといふことをも自分は信じて居る。又戰爭に依つて往々如何に人間の美德が發揮されるかといふことも考へて居る。然し乍ら民族衛生の立場から云へば、戰爭程恐るべきものはないのである、而して其の恐るべき而かも有史以來未曾有の大戰爭が文化を誇れる歐羅巴を舞臺として五年間の久しきに亙りて熄む時を知らず荒れ廻わつた。其の結果が人種衛生上果して如何なる者となつて現はれるであらうか、吾人は刮目して之に注意せねばならぬ。

文明に伴ふ反淘汰の第二例は、醫學或は醫術の進歩である。醫術が進歩し衛生思想が發達することは即ち文明の賜物であつて、この爲めに人間がどれ丈けの利益を受けて居るか測り知ることは出來ないのである。併しながら又一面から云へば、此の結果が往往少なからざる害を人間の上に及ぼして居るのである。斯く云ふと其の言たるや頗る奇矯に聞えるけれ共、決して奇矯でない。何故かと云ふと、既述の如く人間は自然に對する反抗兒で、自然は死せよと命じても、人は彼れの智識に依つて否我れは生きんと頑張つて居るのである。自然は元來弱い者を絶やし強い者を殘して生物を進化せしむべく「死」といふ手段を下して吳れたのである、即ち一個體の死によつて一種族を若返らせ、その元氣を一新せしめて、之

によつて生命の流れを永遠に傳へんとして居るのである、若し死がなくして、老朽した者がいつまでも殘つて居るとしたならば、其の種族全體の立場から之れを觀れば非常に損である。所謂「死」なる「セレクション」の篩にかけられて、弱いもの老朽せるものが奪ひ去られ、活氣ある者未來ある者が殘されて活氣ある生存を主張して居るのである。然るに人間はこの「死」といふ大自然の立派な調節的手段に反抗して、自分の智力に依つて、死すべき運命を有する者にも強て之より免れしめんとして苦心して居るのである。從來の意味に於ける衞生の進歩とか、醫術の發達とかいふことは、即ち此の苦心努力の結果である。人道の立場から云へばこれは誠に立派なことである。けれども、今人間全體として、或は一民族として、其の生物學的の價値を高めて行く上から見ると、是れは必ずしも喜ぶべきことではない、なぜかなれば、死ぬべき運命を持つて居る弱者をも強いて、生かさんとする結果之を人間全體或は民族全體から論ずると非常に苦しんで而して得る處は却つて失ふ所を償ふことが出來ぬからである。

現今歐羅巴各國に來ては、上述の如く、文化の力によつて年々死亡率が遞減して居る。殊に此の死亡率の減少は、乳兒、幼兒を保護することに依つて非常に著しく現はれて居る。是れは非常に喜ぶべきことであるけれ共、併ながら一面から云ふと所謂弱い子供、本來なら生き存へることの資格がない子供を、此の爲めに生き存らへさす、而かも生き存らへさせた結果が、どれだけの利益があるかといふこと、詰り弱い質で生れた子供であるが爲めに、早晩普通の者よりも早く死ぬのである。即ち本來ならば一歳か二歳かで死ぬべきのを、或は十歳まで、或は二十歳まで、活き延ばすに過ぎないのである、唯それだけで事が濟まない。其の爲めに家を支へ子を保育して充分働かなければならぬ年齡階級に屬する者の死亡率が増加するといふ喜ばしからざる結果を生ずるのである。

レックス氏が此の點に付て次の研究を公にして居る。氏は生れて來る子供を三階級に分けて居る　第一は生れ乍らの素質が非常に惡くして自然に任せて置けば、傳染病等に侵されて七歳位迄で死ぬ者、第二は七十歳以上までも長命する體質の强健なる者、第三は零歳から六十歳までに死ぬ者、斯ういふ三つの階級に分けて居る。此第三が普通の階級である。然り而して衞生が發達して乳兒の保護の行き屆いた爲めに、此の第一階級に屬せる弱者の平均壽命は著しく延長したが、悲しいかな、之と逆比例に、第三階級に屬せる者の平均壽命は短縮した　是れは弱者が生育して、其の子孫に弱き素質を遺傳して、一般の素質を低下せしめた結果に外ならぬ。

次に、英國の男女に就て、年々結核の爲めに死ぬる者の數を、各年齡階級に於て計り、夫れが年々どういふ風に推移して居るかといふことを英國統計局で査らべた報告によると、零歳から五歳までの年齡階級の死亡率は一八七〇年には、七五であつたものが一八九〇年には六三となり、一九〇〇年には五八となつた樣に段々減つて居る。然るに四十五歳から五十五歳、或は五十五歳から六十五歳の大切なる年齡階級の者に就て此の關係を見ると、幼年者の下ると逆比例して段々上つて來て居る。例へば四十五乃至五十歳の年齡階級の死亡率は一八七〇年には一九・六であつたものが一八九〇年には二一・七となり一九〇〇年には二〇・八となつて居る。女子に於ても亦全く同樣の關係が見られて居る。

一五、「天外奇談」の現實化

斯くの如き事實は餘程考慮を要すべきことゝ思ふのである。卽ち割合に早く死なゝければならぬ所のものを保護する結果が、幼年者の死亡率が減つて來るに反して、働き盛りの者の死亡率が上つて來て居るのである。斯く體質の弱い者を保護して生き存らへさせる結果として、働き盛りの大切な年齡階級の死亡率を高めることは、卽ちこれ又前に述べた一種の「コントラ、セレクション」である。卽ち弱い者が

絶滅し、強い者が生き殘るといふ自然の現象に反對したものであつて、弱い種を後代に傳へる結果になる。此點から考へて見ると、エドワルド、コスター氏が「精神病者の増加に就ては、精神病の醫家自身が其の責に任せざるべからず」といつた如く、醫術や衛生が進歩して、弱い者が澤山永く生き存らへることは、必ずしも永遠の利益ではない。世の中に結核病者が殖えるのも、花柳病の跋扈するのも、一面には醫學者自らが其の責の一斑を分たねばならぬ次第である。

總てこれ等の關係は、何れも皆、文明が進めば民族に對して却て知らず識らずの間に不利益を持ち來たすといふ事實が能く説明が附くと思ふのである。殊に文明が進んで社會の仕事が段々忙しくなると、其民族の神經或は精神作用が、一面から論ずれば著しく害毒に曝されることになるのである。是れは云ふまでもなく犯罪が増すとか、或は自殺者が増すといふことを考へて見れば能く分るのである。殊に所謂世紀末と唱へられつゝある現代にありては、自然科學が非常な勢で進歩し、其の結果として人間が思ふが儘に自然界を征服し得て、自分の欲望を滿たし得る様になり、昨日までに殆んど空想として、迚も出來まいと思つて居つたことが、今日は現實となつて目前に出て來ると云ふ有様になつた。殊に人間の智力の進歩に伴ひ、機械の應用が盛になつて來る關係から、昨日までは數十百人かかつても出來なかつた事も、今日は唯一つの機械で出來る様になり、工業は盛んになり、資本が百事を支配する様になると、富める者は遊んで居ながら益々富み、貧しき者は如何に汗水たらしても「パンの一片」をすら得られなくなつて來る。玆に於てか多數の人は生存の不安を感ぜずには居られなくなつて來る。而して總ての事柄は走馬燈の如く時々刻々移り變る、人間の心身は愈愈動揺する。僅か二十五六年前のことであるが、私の子供の時に『天外奇談』といふ小説を讀んで非常に面白く思つたことがあつた。其れには甲の國と乙の

國とが戰爭をして、其の際或る神秘の裝置を使つて天空に昇つて敵國を攻擊する、そして神と惡魔との間に見られた樣な天空戰が行はれる。或は海中深く沈んで、敵の軍艦を攻擊する、或は又不可思議な藥品を拵へて其の藥品を投げて敵の大都市の人間を全滅せしめたとかいふやうなことが書いてあつたが、斯の如きはこの時代には誰れしも一つの天外奇談として思ひもよらぬ出來事として居つたのであるが、何んぞ知らん今日の戰爭に於ては其の奇談は毫も奇談でなくなつた。目のあたり實現されたのである。

斯くの如く激しく人間の智識が進んで來て、時々刻刻に世の中が變り移るに連れて人間の生活は絕えず不安の狀態に陷る。道德にせよ、宗敎にせよ、將た學問にせよ、昨是今非で、舊き權威は容赦なく破壞されて、而かも、未だ新しきものがそれに代る遑がない。人の心は恰も舵を失ふた船の如く歸著する所を知らなくなる。さうして一面生存競爭が益々劇烈を加へ、一面人間の欲望をそゝり立つものが日一日殖えて來る。少數の優勝者は安逸によつて得た惡錢を振り撒いて此の欲望を滿足せしめて得々として居るが、多數の劣敗者は徒らにこれを羨望するのみで得ることが出來ない。其處に欝勃たる不平が起る。其の結果遣る瀨なき懊惱の爲めに自殺する。然らずんば自暴自棄に陷つて耽溺生活をやらずには居られなくなる。此の風潮は實に滔々として世紀末の現代に於て目前に展開されつゝある淺ましき人生の活繪畫である。而かもこの不安煩悶せる人の子に慰藉を與へ敎訓を加ふべき、宗敎とか或は道德とかいふものの如何と顧みると、既に述べたる如く、權威は全く地に墜ち、信仰信念は根柢より動搖し、而して其れに代るべき新しき信條或は權威といふものが容易に打ち立てられない。人は唯生存を得んが爲めの刹那の劇烈なる競爭にのみ追ひ廻されて他を顧る遑がない。人は斯くの如くにして墮落せざらんと欲するも得ないのである。

又一面からは、文明が進めば進む程、弱き人の子

を重く重く壓し附くべき重荷が増して來る。何となれば、世が進むにつれて、人は彼れの智慧に依つて造り上げた有形無形の財產を盛んに豐富潤澤ならしめて、是を後代に殘す。是れ卽ち『文化』なるものであつて、誠に人間の力の偉大を語る者ではあるが、併し後代に生れる者は、其の廣大なる遺產を彼れの努力によつて自分のものとするに非ざれば、到底せち辛らきこの世の中に生存を保つて行くことは不可能になる。實際、文化は恰も金字塔を逆にした樣な者で、時を經て夫れが高く積まるれば積まるゝ程、益々廣く愈々重く人間を壓迫する者である。而して是れに耐へ得て生存を主張せん爲めには、非常に心身を過勞せしめ人生の半以上も學校生活で過ごし、終には其の生產力も萎黴涸渇せしむるに至るものである。

一六、民族衞生の根本義

斯く論じ來れば生物的醫學的の立場から、文化に伴ふ「バイオロジカル、プログレッス」と「トラヂショナル、プログレッス」との不調和が、民族をして花と咲き花と散り、一榮一落する所以の主要なる原因たることを明かにし得た。果して然らば、吾人は宜しく其れ等の點に著目して、出來る限り此の不調和の起らないやうにすることが大切である。而して是れ實に民族衞生の根本義である、卽ち斯くすることによつて、恰も一個の生物が、或る時機に當りて適當なる生殖の處置を取ることによつて、よく自己の種性を保護し、生命の流れをして不斷ならしむると等しく、一民族或は一國民が其の生存を永く主張し得ることを信ずるのである。然らば卽ち民族衞生の大方針は何處にありやといふに之を二つに考へることが出來る。卽ち「トラジショナル、プログレッス」と「バイオロジカル、プログレッス」との調和を計ることを目的として居るものが、二つの方面に於て、其の開展を計つて居るのである。其の一つは、卽ち「ユーゼニックス」であり、他の一つは、卽ち「ユーテニックス」である。「ユーゼニックス」とは、人種改良學又

は優種學と譯されて居る、新らしき學問及び其の應用であつて、畢竟ずるに人間其物の稟賦の性質を改良して行かうと云ふのが、其の目的である。之れに反して、「ユーテニックス」とは、優境學とも云ふべきもので、人間の外的、社會的生活の關係、卽ちあらゆる環境を改善しやうと、努力して居るのが其れである。

此の二つのものは、實に人種衛生を支ふる二本の大黒柱であつて、兩者相待つて始めて、根本的に人間の幸福を進めて行くことが出來るのである。然り而して、此の二つの方面の中、「ユーテニックス」方面は、之れは昔から人間が、充分にそれに留意して、其の爲めに努力しつゝあつたものである、卽ち例へば、法律を編んで罪惡の殖えないやうにするとか、或は社會的組織を改善して、貧富の懸隔を調和するとか、或は敎育に依つて、人の智識を啓發するとか、或は宗敎に依つて心を救ひ、醫學にて體を助けるとか、總べて其等の點は、人間が是れ迄やり來つた所の仕事の大部分を占めて居るのである。併しながら、他の方面たる、「ユーゼニックス」の仕事、換言すれば、人間の稟賦卽ち遺傳性と云ふものに、著目して、之を改善するに非ざれば、到底民族の永遠の命を維持することが、出來ないと云ふ方面の研究は、漸く最近に到つて、心付かれたる事柄である。

一七、良き珠を求めて之を磨け

元來一般生物に於て、其の種性の大切である事は、實際古くから知られて居つたのみならず、之を活用して大いに見るに足るべき成功をして居つたのである。卽ち或は農業に、或は畜産に、或は園藝に、人は昔から種の選擇に重きを置き、而して又これと同時に充分に之に肥料をやることを怠らなかつた。肥料をやるのは、卽ち「ユーテニックス」であり、種子を選ぶのは、卽ち「ユーゼニックス」である。然るにも拘らず、人間は、此の大切なる仕事を人間自身の上に施すことを、忘れて居た。彼れは、自分の種性を選ぶことを等閑にして、汲々として外にのみ力を

竭して居たのである。法律に依つてのみ、罪惡を無くさうと力めた。醫術に依つてのみ、身體を强壯にしようとした。敎育に依つてのみ、人間が賢くなるものと夢想して居つた。勿論敎育も、醫術も、法律も、凡て大いに必要である。さり乍ら、獨りそれのみに依つて、人間の永遠の幸福を企圖するのは、大なる誤りである。勿論『玉磨かざれば光なし』で、磨くこと云ふことは、大いに大切である。然し乍ら、磨く前に爲さねばならぬ更に一層大切なる仕事がある。夫れは他ではない。磨くべき物の選擇である。然らずんば、如何に磨けばとて、磨くことは全然徒勞に終るのである。瓦は如何に是れを磨いても、畢竟到底瓦たるを免れぬ。磨くと云ふ大切なる努力をして、充分に效果あらしむるには、先づ以て、その前に磨くべき材料を選ばなければならぬ。人間の外的環境を改良し、圓滿にして行くことは、無論非常に必要であるが、夫れよりも、先づ以て人間其者を改良して行くことが、更に一層大切である。換言すれば、人間の中に於て、惡種を剪滅し、善種を保護すべき仕事に著目しなければならぬ。然らざれば、法律も、敎育も、醫術も、あらゆる人間の努力は、悉く皆徒勞に歸せなければならぬ。此の點から云へば、最近十數年間の生物學の進歩に依つて呼び起されたる「ユーゼニックス」は、人種衞生上の一大革命と謂ふべきである。

然らば即ち「ユーゼニックス」が、據りて以て其の進路を定むべき根本と、羅針盤たるべきものは何んであるか。

元來あらゆる生物の現はす所の形態的及び機能的性狀は悉く皆遺傳物質なるものに依つて、決定せらるゝのである。而して、此の遺傳物質なるものは、何處までも、變化しないものである。隨つて生物が、一代の間外界の影響に依つて蒙つた形質の變化は、遺傳物質に夫れと同樣の變化を喚び起して、後代に遺傳するものではないのである。若し遺傳物質なるものが、外界の影響を受けて、根本的に變るもので

あるならば、我々人間が、今までやり來た方針、卽ち我々の環境を改良して、或は社會政策に依り、或は敎育に依り、或は宗敎に依りて、世々代々遺傳的物質を變化せしめ、之に依りて人間の種性を改良すべき大目的を貫徹することが出來得べき筈であるが、併し乍ら、生物學の示す所に依れば、生物が一代に得たる形質の變化は、其の遺傳物質に變化を起し、後代に之を遺傳することは無いのであるから、夫れは到底望まれないことである。であるから、我々はどうしても、種性の善良なるものを選擇するに非ざれば、到底根本的に種性改善の目的を遂ぐる譯には行かないと云ふ確信に到達したのである。

茲に一言せねばならぬ事は、遺傳物質が變らないと云つても、其所に誤解が無いことを望むのである。例へば、こゝに一塊の石があつて、其の石が何時迄經つても碌々たる一個の石であるが如き意味に於て、遺傳物質が不變であるといふのではない。總べて生物には、變化がある。變化がある爲めに進化が起るのである。生物は決して永久不變の石の如きものではない。遺傳物質は、外界と全然沒交渉のものではない。例へば今分り易い爲めに、一例を取つて示すならば、茲に豆がある。此の豆の遺傳物質は極まつて居る。此の豆が、如何なる實を結ぶかといふ事は、遺傳物質に依つてきめらるゝのである。併し乍ら、其の性狀は、遺傳物質が外界と交渉することに依り始めて現はれ來るのである。此の內外關係が相應じて開展して行くこと、是れ卽ち發達乃至發育である。であるから、假令善い種子であつても、唯之を蒔いた丈けで、之に肥料を施さず、これに日光を與へず、これに水を加へなかつたならば、其種子は、到底發育することが出來ないのである。或は發育しても、極めて微弱なるものになるのである。さうして其の遺傳物質が、發現し得る範圍に於て、一番惡い有樣になつて現はれ來るのである。又惡い種子であつても、栽培に注意すれば、其の遺傳物質が現はれ得る範圍に於て、最も大きい、最も宜ろしい

有樣を持つて、現はれ來るのである。

一八、環境と遺傳とを解決する鎖鑰

元來形質の遺傳と云ふのは、色にせよ、形にせよ、其色、其形、其の物が遺傳物質ではないのである。遺傳物質とは、或る一つの形質を決定すべき者で、而かも夫れが未發の狀態にあつて、斯る條件の下には、斯くなつて現はれるといふ性質を具へて居るものが、遺傳物質である。例へば、甲なる種類の櫻草は、溫度の如何に關らず、常に白色の花を開く。之に反して、乙なる種類の櫻草は、其の花の色が、溫度の如何に依つて變化する。溫度が低くなれば赤い花を開き、溫度が高ければ、白い花を開く。しからば、則ち高溫度の爲めに、乙なる櫻草の遺傳物質が變化して、甲と同樣の遺傳物質となつたのであるかといふに、決して然らず。甲なる櫻草の遺傳物質は、溫度の如何に關せず、常に白い花をつける本性を持つて居るに反して、乙なる櫻草の遺傳物質は、高溫にありては、白い花を開き、低溫にありては、赤い花を開くといふ本性を具へて居るのである。從つて高溫で乙の櫻草が白い花を開いたからといつて、決して之を以つて、直ちに乙が甲に代つたとは云へない。甲は何處迄も甲、乙は何處迄も乙で、其の遺傳物質の本性は、依然として、何等變化するものではない。遺傳物質の本性は、上述の如きものであつても、外界の影響に依つて、其の開展する狀態は、或る範圍に於て違つて來る。玆が卽ち發育といふ面白い現象の起り來る所以である。同一の種子を蒔いても、其の培養の巧拙で、實際其の收穫には、尠からざる相違が起つて來る。玆が「ユーテニックス」の附け込む所である。さり乍ら環境の改善に依つて、變化し得る範圍は限られて居る。之れに依つて惡種を變じて、全然良種たらしむる事は、到底不可能である。是實に環境と遺傳との問題を解決すべき鎖鑰である。『氏より育ちか』將た『育ちより氏か』の問題に、明瞭なる說明を與ふべき理法である。

孔夫子は『上智と下愚は移らず』と云はれたが、是

れは、遺傳物質の變らないといふことを示したものである。また「性相近し、習相遠し」と云はれて居るが、是れは、後天的影響、卽ち環境の如何が遺傳物質の開展の上に如何に重要なる意義を有するかを敎へて居るものである。就中人間の如く最も聊賴なき狀態に於て生れ來り、而して長日月の發育に依りて、萬物に拔んでゝ、最高級の位置に達するものにありては、後天的影響、卽ち環境の是非善惡が、非常に大切なる意義を有つのである。此の意味に於て、獨り「ユーゼニックス」の大切なるのみならず、「ユーテニックス」も亦非常に必要である。さり乍ら、從來の如く「ユーテニックス」のみに著目して居つたのでは、到底人間の幸福、民族の永續を企圖することは出來ぬ、斯る立場から、歐羅巴、就中亞米利加の如きは、非常に熱心に、人間の遺傳に關する材料を蒐集し、之れが關係を研究し、且つ又上記の理由に基いて、法律に依りて、結婚の上に、色々適當なる制裁を加へ、更らに進みては、惡種を剪滅すべき目的から、精神病者、常習犯罪者等に就いて、或は輸精管を結紮若しくは切斷し、或はX線に依りて睾丸を照らして、之に依つて生殖不能に陷らしめて居る。然れども、斯くの如きは、畢竟、惡種を剪滅すべき消極的人種改善であつて、之れと同時に更に進みて良種を保護すべき積極的人種改善が、實行せられねばならぬ。而して斯くの如きは、法則によるよりも、寧ろ敎育の徹底に基く、人々の自覺に依らねばならぬ。吾人は此處にも亦荒漠たる敎育の新開拓地を見出すのである。

今や一千五百六十七日間、世界を震撼したる未曾有の大旋風は、あらゆる有形、無形のものに大破壞を加へて、漸く去らんとして居る。獨逸は之が爲めに、百三十萬人、墺匈國は百萬人、露國は二百三十萬人、佛國は百二十八萬人の尊き生靈を失つた。この大破壞に次で起るべき大建設中、蓋し民族衞生の如きは、其の最も鋭意に、最も愼重に、最も根本的に、劃策せらるべきものゝ一であることは、何等疑

を挾むの餘地が無い。茲に於て、此の一小論文を草して、天下の有識者に訴へんとする所以のものは、我が大和民族の『バイオロヂカルプログレッス』をして、世界の此の進運に後れざらしめんが爲めの微衷に他ならぬのである。

叢談

大阪に於ける女子の水泳設備

醫學士　淺田一

一

私は昨年の夏小痾を得て私の恩師片山、三田兩先生の許可の下に休暇を頂き郷里なる大阪へ歸りました。暑い夏に暑い南の國へ行くのは隨分變なものですが、住み馴れた濱寺邊に一夏を靜に暮したいと思つたからでありました。所が毎夏濱寺に大阪毎日新聞社と南海鐵道とが海水浴場を開くと同時に水練場を設備して廣く男女老幼を問はず諸種の水泳を敎へて居ります。私も嘗て高等學校の生徒時代に此所の男子部の水泳を二三年夏毎に敎へたことがありました。昨年以來同水練場々長である大阪毎日新聞社員里井賢吉君は私の中學同窓でありますが、毎年女子部の敎師には人選に困り、無妻の若い先生では兎角の評判が立ち易いし、というて船夫をお孃さんの先生とする譯にも行かず、此所頗る當局者の頭を煩はし、止むを得ずんば多端なる場長自ら女子部を引受けんといふ所でした、最も本場創設以來殆んど缺かさず眞面目にして崇高なる工學士石澤寛志君が女子部を引受けてくれて居たので、本場は平穩無事であつたのですが、今年は石澤學士は播州方面へ出張しなければならないので如何しても人が足りない、茲に於て同窓なる里井場長及び同場顧問にして之亦

私の同窓なる陸軍一等軍醫村上謙次郎學士の勸誘により、如何せ遊ぶのだからと勝手に女子部を擔任することを約束し、七月二十五日から八月二十五日まで一ケ月間女子部の水泳を受持つて見ました。

二

當場は昔から種々の流儀を參酌しまして頗る公平に、頗る廣く何流と拘泥しないで游泳技を教へることゝなつて居ります。抑々當場創設者の多くは紀州の小池流から出た所の本間水練學校を出身したもので、私も中學時代に本間學校で河童を習つたのであります。然し一流に拘泥して居ては技術の進歩を來すことが出來ませぬから、日本中と申しましても主として水戸、東京方面の水府流、伊勢の觀海流、美作の神傳流、紀州の野島流、小池流、九州の小堀流などをも研究し、諸外國の泳法をも參照して系統的に先づ平體泳法を教へ、次で種々の變法を教へることにしたのであります。

當女子部では小さい子供には平體泳法、即ち足を蛙の樣に動かして兩脚間に水を挾み足蹠で水を後方に蹴る泳法を教へます。年頃のお孃樣より以上の年配の人には水府流に近く煽り足を使はして下半身を橫體とし、上半身だけは平體として教へます。最初は海岸に手を付かせて頭は水上に擧げたまゝ胴と脚とを浮かして脚の動かし方を手で持つて教へます。自分で規定の脚部の運動が出來る樣になるのは大抵早いのは第一日、遲くとも三日位で出來ます。女では如何しても大腿を左右に擴げられないものが大人は勿論ですが、子供にも少くはありませぬ。こんなのは一目夫れと分りますから、橫體として改めて教へます。それから顏を水中に浸し呼吸を停止し、枯木の如く水上に全身を浮かすことを稽古さします。之は初め水に對する一種の恐怖を持つて居て中々出來ぬ人もありますが、無理にさせますと一日で出來ます。この出來ぬ人は中々泳げる樣になるのに暇がかゝりますが、浸顏呼吸停止浮身法を行ひ得る人は容易に泳げる樣になります。即ち之が出來ると次に

手足の綜合運動を敎へます。脚部を後方に伸長すると同時に手は前方に揃へて伸ばすのであります。脚部を縮める間には軀幹が水に沈まんとしますからこの間に兩手の指間を閉ぢて左右に水を壓へながら乳の邊まで持つて來るのであります。之を能く監督して綜合運動が出來る樣になれば、頭を擧げて手で水を強く抑へて同一の綜合運動をやらせるのであります。早い人は既に三日目に顔を擧げて一間位泳げる樣になります。遲い人は十日甚しきは二十日もかゝります。顔を擧げて一間位泳げるまでを初級二班としまして、二間以上を泳げる人を初級一班とし、毎日唯進行泳法ばかりを稽古させます。

二十間以上泳げるか否かは一週間毎に檢査しまして、之に及第した人は中級に進級させまして、此級で種々の技藝を敎へます。當場では中級には足ばかりで泳ぐ方法を敎へます。立泳と申しまして足を左右に廻して水を蹈み手を動かさず水に浮かすか又は太刀を持つ樣な恰好をして肩又は乳の邊まで水上に浮かす泳方、又は斜に足を後下方に蹈で手は進行に用ひず、腰の兩側に水をチャブ〱躍らせる泳方(之は小池流では鴨と申して居ります)を敎へます。尙早泳法であります所の兩手で交互に水を前から後に拔く所謂拔手泳も敎へます。二町以上泳げる樣になれば上級に編入しまして手泳法卽ち足は唯後に伸ばしたまゝで手だけで泳ぐ方法を敎へます。尙興味の爲に手だけで泳いでぐる〱廻轉させます。

拔手の中にも種々の小分がありますが、上級では一つ掻と二つ掻とを敎へます。更に浮身術卽ち仰臥位で手は頭の方に伸ばし兩脚は眞直に揃へて伸ばし所謂筏流しの形を取らして、自由に呼吸し乍ら何時までも水上に浮いて居られる方法を敎へます。浮身にも樣々な變態がありますが、女に出來るだけのことは敎へます。それから鯱飛と申し泳ぎながら水を足で下に蹴ると同時に手で水を切つて水上に飛び出る方法も敎へます。次に投水を敎へます。女には主として平飛又は陣笠飛と申して居る飛込方を敎へま

す。卽ち頭を水中に浸さない樣にして飛び込む方法で實用上最も役に立つ方法であります。逆身と申しまして頭から水に浸して浮き上る飛び込み方は大抵の婦人は嫌はれますから、唯希望者にのみ敎へました。そして卒業試驗には沖合を二里の間泳がし尙藝としては平體、横體の泳法、拔手二種、脚部のみの泳法、手のみの泳法、鯱飛、浮身二種以上、投水法に就て試驗し、凡て及第の人を卒業させます。早い人は夏の初めに水泳を習つて初級であつたのに一ヶ月の後既に卒業する人もあります、多くの人は中級又は上級まで來て、來年になつて卒業致します。

三

以上申しました通り大阪濱寺の毎日新聞社主催水練場の敎授法は頗る完備して居るのでありますが、之が爲か當場女子部に來る人は年々增して來るやうであります。今年は約百六十人程の在籍者がありましたが、毎日平均四十人位しか出ませぬ。一番多い日は七十何人でありましたが、丁度この一番增した頃に大阪の米騷動が始まりました爲に急に外出が危險になつて來ましたから、出席者の數がその半數以下に減じました。それで出席日數を調べて見ますと七月十五日から八月二十五日まで日曜なしですから四十二日間ある中、最も多いので三十何回、少いのは十回とか五回とかいふのがあるほどで、全出席の人はありませぬでした。尤もその中雨で休場したことが五日ほどありました。時間は午後一時半から二十分入水しては十分間陸上で砂浴をなし、四回入水せしめるだけでありますが、上級生には引き續いて泳がせることがあります。ですから、一日と申しても一時間半であります。その中遲れて來たり早退したりする人もあります。

四

入水前には各生徒に與へてある番號を一々云はして帳面に控へまして、人員を能く調査し、耳の病人や心臟のわるい人、脚氣の人などを檢査し、かういふ人は水に入らせませぬ。入水に先ち唾又は水で耳

孔を濕し、手足の指の關節を柔げさし、水を出てからは再び人員を能く調べて後砂浴をさし、最後に水から出るこ人員調査濟の上で井水で全身を拭淨し、耳に入つた水は能く簡箋縒又は脱脂綿で掃除さします。鼻汁は片方づゝかむ様にし、汚水が歐氏管の方へ入らぬ様に能く注意致します。寒い日には早い目に水から出して早退せしめ、又個人々々に就き顔色の悪い人は早く歸らしました。

五

不健康地の大阪でも毎日茲に來るお孃樣達は何れも印度から來た樣な皮膚の色となり、次第に丈夫になりまして、一人として當場に來た爲に病氣になつた人はありませぬ。少しも泳げなかつたのに卒業するに至つた人は十一歳の少女で唯一人でした。卒業生は十一人ありましたが他は十二歳以上十七歳以下の少女のみでありまして皆二年目でありました。初めから來て上級まで進んだ人が十人程小級まで進んだ人が三十人ほどありました。中級位で止つた人の多くは出席二十回以下の人で上級になつた人は是以上であります。他の初級に止つて居る大多數の人は出席が一定せず又は早退、遲刻などする人で全出席數十五回以下の人々です。

二十歳以上の奧樣連が十人許り、三十歳以上四十歳位の夫人が二三人、四十以上六十以下の方も二三人見えました。かういふ方は特に希望された方のみに御教して嫌はるゝ方は放任し唯危險を監視するに止めました。かういふ方々は髮を水に漬けるのを嫌はれますから中々進歩しませぬ。それでお孃樣に從いて來た序に海水浴の積で海に入られ、時々少女達の眞似をしては水中で運動なさることがどれほど身體のお爲になつたか知れませぬ。

六

之は在籍者總數から云つても僅に百五十人ほどで大阪の人口の一萬分の一位でありますが、漸次盛になる傾のあることは誠に喜ばしい現象であります。かくの如き設備とかくの如き注意とを以て臨んだな

らば、決して身體に害のあるものではありませぬ。日々に技術の進んで行くのは本人も敎へる吾々も非常に愉快なもので、少し泳げる樣になりさへすれば、中々休まなくなるものであります。當場は新聞社の主催であるが爲に出缺自由自在で、出沒常なき人が多かつたものですから身長、體重、胸圍、腹圍、其他生理的狀態の變化などを調べることの出來なかつたこと、從て茲では具體的に水泳の效果に就て御話申上げることの出來なかつたのは殘念であります。唯大阪の子女の體格がかゝる設備によりて幾分づゝ改善されつゝあることは疑もありませぬ。今度の風にたつて夏中出席して居つた生徒は餘りかゝつて居りませぬ樣の話であります。少くとも皮膚は非常に丈夫になることは受合であります。

一體水泳といふ運動は、男子よりも女子の方が脂肪が多い爲か速に親しみ得るのであります。ちつとも泳げない少女が能く水上に枯木の如く、筏の如く、又は兩手を腰の兩側に接着した形卽ち所謂鎗浮などが出來ることがある位であります。

この運動は「テニス」や「ベース、ボール」などの樣に主として片手の發育を促がす樣なことはありませぬ。殊に平體で稽古致しますと身體諸部の筋肉一として動かないものはない位で、全身の均等なる發育を期することが出來ます。單に泳ぐ許りでは厭きも致しますが、諸種の藝を加味しますと中々面白味の多いものであります。それを水泳の基本泳法は勿論のこと、各技藝におきましても凡て護身用、實用向きでありまして、單に運動の爲ばかりではありませぬ。その上日光浴、空氣浴、砂浴を兼ねまして「オゾーン」に富める海氣を呼吸し、鹽類其他皮膚刺戟物に富める海水中で運動するのでありますから、其保健上の效果は甚大なるものであります。私はこの意味に於てお孃樣方が炎夏進んで海に活動せられんことを御勸めしたいのであります。唯茲に御注意申して置かなければならぬことは、かゝる海水浴場では不良少年も多く、飲食店も多いことであります。不

良少年を豫防するには、第一家人が附添つてお出でになること、第二には家人の附添不可能ならば數人誘ひ合せて團體をなして行かれたならばよいと思ひます。飲食店の豫防は小使錢を餘り渡さぬ樣にすればよいと思ひます。胃腸も丈夫になりますが、歸りがけに氷や不消化物を澤山召上る樣では折角の海水浴も效果を幾分又は大に殺ぐことになりますし、且は不良少年等と話し合ふ樣な機會も多くなることでありますから、この點は充分に御注意なさらなければなりませぬ。

私は東京月島の女子部水練場を視察しませぬから、如何いふ設備であるか存じませぬ。又大阪の西の宮打出の方にある女子水練場も能くは知りませぬが、かゝる水練場は第一信頼すべき人格の高い人か、又は確固たる法人が作つてくれて、第二に教師にも兎角の風評の虞のないやうな立派な人間を選むことが必要であらうと思ひます。兎も角私は大阪毎日新聞社主催の樣な完全な女子水練場が東京にも今一つ位あつて大阪に負けず、大に女子體育に資せられればよいと思ひます。

室内の塵埃と掃除法（承前）

醫學博士　佐々木秀一

一、塵埃の有害作用

職業の種類によつては恰で塵の中で働いて居るやうなのがあります。然かしながら塵の爲に直に窒息するとか又は直に病氣を起すとか云ふのは割合に少ない。此の理由は塵其物が毒物である場合が少ないからです。塵の有害作用と云ふのは間接に起るので先づ鼻や口から吸込まれて其粘膜を刺戟して、鼻加答兒とか咽頭加答兒とか少し深く這入ると喉頭、氣管、氣管枝等の加答兒を起すのであります。夫等の呼吸器の加答兒が更に險惡な種々な呼吸器病を惹起すことになるのであります。一體、健康な呼吸器粘

膜は夫々巧妙な防禦裝置を備へて居るので、例へば鼻孔から塵を吸込めば鼻粘膜は之を濾過し鼻汁と共に外に出して仕舞ふ、又た奥の氣管枝にまで塵が達して其粘膜に附著しても、其處には纖毛上皮細胞と云ふ巧な働の掃除作用があつて之を外の方に送り出して仕舞うと云ふ風になつて居ます。故に一時に少しの塵を吸込んだからとて割合に驚くには當らないのである。然しながら室内の塵埃の多少は大抵一時的のものでなく、不衛生な塵の多い室は殆ど毎日又は年中塵が多いと云ふ事になる。故に塵の有害作用も一時的でなく年中である。從つて巧妙な呼吸器粘膜の防禦裝置も遂には破綻を來し、急性の加答兒から慢性の加答兒を起し、其加答兒のある處に病原の黴菌が偶然繁殖を初めて遂に重い呼吸器病を來たすやうな事になるのであります。塵の多い室に仕事し又は住居する者には肺結核が多く、流行性感冒の後に肺炎を續發する場合なども多いのは當然であります。又た一と度、呼吸器病に罹つて依然、塵の多い室に居れば中々治癒しないのも其筈であります。故に室内の塵の多少と掃除法の良否に注意する事は衛生上甚だ重要な事に屬します。

一、室内掃除法の上手下手

日本室の一般の掃除法は時として滑稽な事があります。即ちはたきで障子や床の間をはたいて沈んで居る毛塵や砂塵を浮立たせ次に箒で掃いて同様に疊の上の塵を飛散させ椽側の方に掃出した積で居るのです。然るに毛塵や砂塵は決して箒で掃き出せるものでないので、二三時間の後には又た舊の如く障子や床の間に沈著して居る。すると掃除は要するに無駄な仕事で無益な勞力に過ぎない事に歸著します。斯の如きは最も下手な掃除法と云ふべきです。然らば上手な掃除法は如何と云ふと、夫は是非とも風の力を利用しなければ駄目である。毛塵や砂塵は風の力を得て始めて箒が役に立つのです。故に今、南北に出口のある室を掃除する場合であると仕ますと、南風の吹く時は北の方に掃き出し、北風の吹く時は

南の方に掃き出さなければ駄目である事は子供にでも判る話である。而して塵を掃出したならば暫く時間を置いて毛塵が再び落附いた頃を待つて初めて水掃きをすべきで、是が上手な掃除法であります。處が實際に於ては多數の家庭で私の云ふ下手な掃除法をやつて、南風のプウ〳〵吹込む室で南の方に掃出すやうな事が甚多いのです。夫は無智だと云ふ譯でなく、室の構造が悪い爲に、さうでなければ掃除の出來ないやうな場合も多いのです。又は家内の交通を便利にする爲めに中廊下があつて、爲に私の云ふ上手な掃除法が行はれない結果になつて居る家もあります。

一、修飾的掃除と實用的掃除

日本室の掃除に最も理想的なのは眞空掃除器でありませう。然かし之は未だ一般の家庭に備へ附ける譯には行かない。故に在來の掃除法を用ふるとしたならば風の力を利用する事を忘れてはならない。次に掃除法に就て必要な事が尚ほ一つある。夫は掃除の度數であります。一般の家庭では掃除は朝夕二回すべきものと決めて居る。故に夏季の砂塵の多い場合でも二度、子供部屋の如き跳廻て塵の多い室でも二度きり掃除を仕無いと云ふやうな習慣が往々あります。衛生上から云ふと隨分滑稽な習慣であつて、是非とも改良する必要があると思ふ。即ち室の塵の多きに應じて一日五回でも十回でも掃除すべきものは掃除仕なければなりますまい。然しながら夫では一日中、掃除で暮さなければ無らないと云ふ不便がある。故に塵の多い室に於ては掃除を二種類に分つが良い。一は丁寧な掃除で或は修飾的な掃除である。乾掃でも艶出でもするが良いのです。一は實用的掃除で隅の方の塵などは取れても取れなくても宜しい大體の砂塵や毛塵を除き去つて衛生上差支のないだけにするのであります。而して修飾的掃除は一日一回でも二回でも乃至二日三日に一回でも良い事にして其代りに實用的掃除は一日何回でも必要に應じて行ふので、私が診察室を一時間毎に水拭掃除を

するのも要するに此理由に基くのであります。

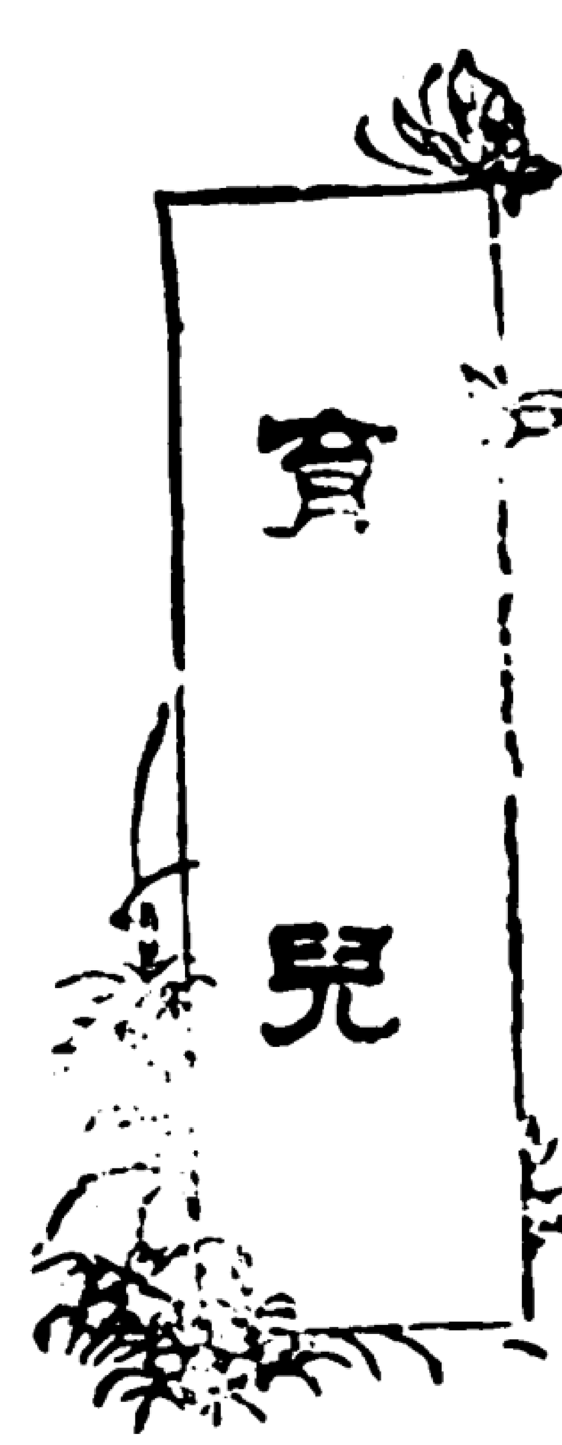
一、掃除法の難易

保健の上から室内の掃除は度々する方が良いとしても、在來の掃除方法は甚だ手數を要し又た時間を要して不便を感じます。箒で掃く方はまだ手數が少ないが、水掃の方は水桶に雑巾を要し、殊に四這ひの姿勢で拭く事が甚だ面白く無い上に、冬季は湯を用ふるにしても凍傷を來たし、何となく掃除は好ましく無い仕事に數へられて仕舞ひます。然しながら此の水拭掃除も仕方によつては時間及び勞力の幾分を省く事が出來ると思ふ。例へば雑巾を一枚使用して、汚れた度に濯出してば拭く事をせずに、雑巾は一時に十枚なり二十枚なり多數を要するものと定め置き、清水を以て豫め必要だけを濯出して箱又は笊の内に入れ置き、順次に使用して、最後に又一時に濯ぎ出すが如き事も一の方法であると思ひます。又た呼吸器病患者の寢て居る日本室では一切箒を使用する事を禁じ疊の上も水拭掃除をさせますが、私は常に看護人に敎へて普通の手拭を使用させ、夫を清洗して堅く絞り丁寧に折疊んで裏返へし又裏返へして拭かせます。すると一枚の手拭を一度濯いだゞけで十疊敷位の室は完全に塵を除き得るのであります。前に述べた所の私の考案した水拭掃除器と云ふのも同樣な理由に基いたので、修飾的掃除でなく實用的掃除に適させたのであります。序に其大略を述べて御參考に供しませう。

一、私の考案した水拭掃除器

是は四這の掃除を改めて立位にする爲め長い木の棒の先きに布を卷く部分がつけてあります。其布も一々濯出す手數を省く爲に廻轉軸に長く卷き附けて置き、掃除の結果で汚れた部分は齒車と「バチ」の作用で少しづゝ別の廻轉軸に自働的に卷込むやうになつて居る。故に使用に際しては何の手數も要しないので、柄杓なり鐵瓶なりから水でも湯でも流して此卷布を一寸濕ほし、夫で板の間を立つた姿勢で拭ふのである。拭ひ方は手前には決して曳かず常に前方

に押進み、汚れ方に應じて三尺なり六尺なり進めば、初めて手前に輕く引き齒車の音がピチと一つ鳴れば其處に新鮮なる布面が自働的に現はれ出づる故、其儘再び前方に押進むのであります。故に前方に進むには此掃除器を牀より離さず其儘何間にても一氣に進むべく、次で方向を廻轉する場合だけは此掃除器を一度牀上より離して向き直るを要します。唯其れ丈けの簡略な掃除法であるので五六間の廊下なれば二三分の時間で實用的掃除が行はれ、一日何囘でも何等の面倒が無いのであります。尤も使用した布は後で濯出す必要のあるのは勿論であるが、掃除が即座に出來る事の方が、甚だ必要であつて後の手數は又た何とでも都合が出來る事と思ひます。



母の病氣及び子供の體質より見たる「ちゝ」の話

醫學士　高峰　博

一、老人が女の乳を飲む話

「近き頃京師に一老男子ありて、婦人の乳汁を飲む事を好み、初産の婦人の乳房堅くて、乳汁出がたきものを吸ひ出して、乳汁の道を通ずといふにより、新産の婦人は皆、此の老人をまねきて　乳を吸ひ出さしむ。此老人日夜諸方に招かれて乳汁のみを飲みて、他の飲食せずといふ。五雜俎に穰城の人、年二百四十歲、他の飲食を斷じて、唯、乳汁のみ食用して壯健なりと。京師の老人も長壽を得べきにや。奇事なり」。

　これは橘南谿の著、北窓瑣談、卷之四に出てゐる話であるがまことに奇聞である。けれども普通「ちち」と云ば直ちに「赤ん坊」を聯想する。「赤ん坊」が既に生後半年も經つ頃となれば、所謂「人見知をする」。即ち家族や他人を辨別して、見馴れぬ顔であると泣き出す。そして親が抱いてやれば、大抵泣き止む。安心するものらしい。併し、赤ん坊は兩親の中でも、父親よりは、母親になつく。それは、母親の「胸膈に甘露の泉」があるからである。此處に乳兒の唯一の慰安が在るに違ひない。

　併し乍ら、不幸にして此の甘露の泉が枯るゝ如き事あらば、どうしたらいゝか。はた、場合によつては、强ひて愛兒を之より遠けねばならぬ事がある。――この注意、これは母にも子にも肝心な事であるから左にお話しやうと思ふ。

二、如何なる場合は母乳を廢すべきか？

〔第一〕に母の脚氣である。脚氣に罹つてゐる母親の乳は覿面に乳兒に影響し、しかも其の結果の不良のことが尠くない。即ち「乳兒脚氣」を發するので、大抵、其の症候は、乳を吐き易くなり、皮膚の色が追々蒼白となつて、機嫌もわるく、始終、呻吟してゐる。心臟の鼓動も早くなり、呼吸は促迫し、或は音聲が嗄れて、或は身體にむくみを來たし、上眼瞼がはれぼつたく、下垂する事がある。こゝに注意すべきは、强ち母親の方に著しき脚氣症狀が現はれて居らないのに、既に子供に發することである。併し實驗によれば、實は矢張り、母親の乳汁中に逸早く、其の毒が出てゐるものと見えて、子供が脚氣症狀を現してから、二週間乃至四五週間も後に、母親が脚氣であることが分ることもある。だから、醫者は鋭く此の場合を診斷して、子供も母親も共に治療させる必要がある。

　右に、母親とばかり書いたが、つまり廣くいへば乳を飮ます人の事であるから、乳母をおいてあれば、勿論其の人の病氣を診察するのは當然の事である。

そして、乳兒は常に、脚氣病者の乳のみを飮ますから發するもので、牛乳や、其の他の食物を併せて食べさせる子供には起らない。これから見ても乳兒脚氣の治療法は、何よりもまづ其の脚氣病者の乳を離すことである。尤も、時には全く乳離れさせずして、母親の哺乳の分量を減じ、代りに牛乳の類を併用させて、乳兒脚氣の癒る場合もあるが、全く乳を離すのが一番安全で、そして醫者に謀りて適當の投藥を願ふべきである。

〔第二〕に注意せねばならぬのは、母親が若しも黄疸を發してゐたらば、其の乳を飮ませてならぬ。誰れしも、母親が著しく黄疸者となつてゐれば、其の哺乳を躊躇するであらうが、時には素人否醫者が見ても一見したゞけでは黄疸を認められぬ事がある。然るに其の小便を檢査すると判然と分明する。そしてまづ母體に治療を加へると、立ろに子供の「チスペプシイ」が快癒したといふ例がある。だから健康に見える母親の小便も、子供の爲に檢査してもらう事の必要な場合もあるのである。

〔第三〕には母親の月經の調子が尠からず哺乳兒に影響することは、屢〻實驗せられることで、一般に月經來潮時の乳汁は、乳兒に消化不良や下痢を招き易い。

〔第四〕には母の妊娠及び乳汁の關係で、まだ前の赤ん坊に哺乳してゐる中に、次の妊娠が始まると、最初の間はさして乳汁の上に影響がないやうであるが、追々と分泌量が減少し、且つ成分上にも變化あるものゝ如く、此の際乳兒は得て「チスペプシイ」を起し易いのである。故に母親の妊娠と共に授乳を止むべきである。

〔第五〕には、一般に病中の母乳は不良にきまつてゐるが、殊に、急性熱病例へば、流行性感冒や、肺炎や、腸「チフス」、「マラリア」などの際は斷じて哺乳を禁止せねばならぬ。

〔第六〕には結核病者の乳汁、〔第七〕には腎臓病者の、〔第八〕には精神病者、就中、癲癇患者等の乳、

乃至〔第九〕には骨軟化症とて、骨の軟かに曲がりくねる病氣の母乳は、孰れも有害で、子の爲にも親の爲にもぜひ禁止せねばならぬものである。

所で〔第十〕には親が黴毒の時は如何との問題である。勿論、是の如き忌むべき病氣は、子が有らうが無からうが、成るべく速かに治療せねばならぬのは多言を要せぬ事であるが、若し兩親既に黴毒者で、そして赤ん坊が生れたとするなら、其の母親の乳を哺ませても差支へない。殊に母親が妊娠後に始めて黴毒に感染し、而て赤ん坊が幸ひ强健な質であるならば、既に免疫性を得てゐる事が多いとはプロフェータ(Profeta)氏の論ずる所で、旁々母乳で育てるよりも人工榮養法がかゝる子供の發育上には却つて不適當の樣であるから、强ひて母の授乳を廢するに及ばず、それよりも自身共の黴毒に對しては速かに手當するがよい。後年、悲慘な精神病者にもなつたら大變である。

要するに最愛の子供に哺乳する母親や乳母の身體並びに精神の健康なることが、乳兒の健康上、大切な事で、それは單に理窟上の考へや、常識からの判斷のみでなく、現實に赤ん坊の身體に障碍を及ぼしてくるのが何よりの證據である。しかも世人往々にして己が乳兒を醫師の許に診察を乞ひながら、自家の養生を閑却してゐる者多く、又醫師もつひ子供のみ診て、親の方を問ひ訊し、又之を治療することを忘れる事が少くない。共に片手落の譏りは免れぬから、相互、注意したい事と思ふ。余は子供と乳との關係につき、もつと委細の點は、拙著「家庭に於ける子供の愛護」の第二六二頁以下に書いたから、御參照ありたい。

然らば、若し母親や乳母の乳を廢し、而て牛乳を用ゐる如き場合に際してはまた如何なる事を注意せねばならぬか。即ち第一に其の子の體質が果して牛乳に適せりや否や。換言すれば、牛乳に對する過敏性(「アナフイラキシイ」)といふ事がないかどうか。而て第二に牛乳が良ろしきか否かといふ事である。

三、牛乳が子供の體質に適せぬ事もある

赤ん坊に牛乳を與へると、突然、意外な症狀を發する事がある。例へば一茶匙位の少量なる牛乳を飲ませても急に高熱を發し、嘔吐したり、粘液便の下痢を起し時によると便に血液が混在することもあり、又時には皮膚に發疹する事もある。そして呼吸は深く且速疾となり、脈搏微弱にして其顏貌も宛然「コレラ」に於ける如く、卽ち所謂「コレラ」顏を呈する。こんな情態から遂に虛脫して一時、人事不省に陷る事すらある。是の如きは、其の體質が元來、牛乳に適せざる爲らしく、卽ち過敏性の故であると解せられるが、フインケルスタイン(Finkelstein)氏は或る子供は、僅か十瓦の牛乳を三分の一に薄めて服用した處が、亞急性の腸加答兒及び痙攣發作を招いて死んだ事を報告してゐる。

最近マルフアン(Marfan)氏は、右の如き牛乳不適應の兒童、生後五ケ月乃至二歲に至るもの――中には六歲の子供もあつた――に就きて硏究し、其の血液中には未だ該兒の體組織に對して異物質たるべき何物をも發見しなかつたといひ、バウエル(Bauer)氏及びベスレドカ(Besredka)氏も同樣の說を發表してゐるから、果して過敏性論を以て牛乳不適症と解し得るとは斷言し得ないのである。けれども、其の事實上の症候は前記の如く、甚だ過敏性說を考へしめる。

而して是れに對する處置法及び療法は如何、左に、本年(一九一九年)の二月一日發行に係る亞米利加醫學會雜誌(第七二卷第五號)に報告せられた方法を抄出して紹介しやうと思ふ。

四、牛乳不適應症に對する療法

まづ、食鹽注射を施し、又は微溫浴を行はしめ、牛乳は一時、全然廢止せねばならぬ。そして一日間は水のみを與へ、翌日から、母乳又は驢馬の乳を與へる、若し兒童が生後六ケ月以上の時は少し糖分を加へたる粥を與へるがよろし。

然し、母乳も無く、又粥も與へ得ざる如き、乳兒であらば、牛乳に馴れしめる樣にすればよい。其の方法は、最初、一滴の牛乳を五十瓦の水に加へて與へる後、一時間を經て牛乳を二滴加へる。かく毎時間一滴づゝ増加して、遂には毎時間に一茶匙の牛乳にも堪へ得る樣になれば、一とまづそこで右の牛乳水服用を中止し、二十四時間に再び前と同一の方法を繰返へすのである。かうして、追々と普通の一日分の量を攝取し得るに至る迄、同一方法を反復する。尚、此の際、水や野菜「スープ」を與へて、其の液分の不足を補ふべきである。

又、牛乳の代りに「バタミルク」又は「コンデンスミルク」や、乾燥「ミルク」の類を用ゐ、然る後に通常の牛乳を使用すれば、過敏的症狀を起さぬ事がある。其の他の説としてはシュロスマン(Schlossman)氏は牛の血清を逐次〇・一より一瓦迄注射すると本症が治癒するといひ、之に反してサルチ(Salge)氏は其の無效なる由を報告してゐる事も附言しておく。

家庭衞生

迷信打破の栞

文學士　三輪田元道

三輪田氏は迷信の害毒を憂慮し精細なる研究調査の末一般人の爲めにその妄を解かんとして筆に舌に迷信打破に努めらる。こは衞生上特に緊要のことに屬し我邦の家庭改善上忽がせにすべからざる一大事項なりとす。依て次號に於て本問題に關する同氏の演説筆記を掲載すべきも、豫め玆にその要綱たる「迷信打破の栞」を掲げて以て讀者諸姉の參考に供することゝせり。（編者）

迷信の原因。第一干支、第二發音、第三傳説、第四聯想、第五方便、第六曲解、第七邪教。

〔第一類干支〕十二支の動物はＡＢＣの如き符號に過ぎず、又十干は天地の元素を木火土金水と見て、

之を兄弟に分ちたるものなれば、八十三元素以上まで發見せられたる今日に於ては無意味なり。即ち六十一の還暦は、一二と一〇の最小公倍數なるも若し一二と八三の還暦を求めんか、九九六年目となるべし。故に六十一は厄年にあらず。現に大正二年の死亡數を見るに次の如く、決して六十一歳の者が多く死するに限らず。

男女死亡數、六十歳の者……三九八、五四一人、六十一歳の者……三八〇、五五七人、六十二歳の者……三七七、四四二人。

亦世間に忌む丙午の人にても、男性に東郷大將(弘化三年生)、女性に石黒男爵夫人くが子、森村男爵夫人きく子及び星野文學博士夫人きみ子の君等、幸福なる家庭を作りたるもの多き實例を引證せんか斯る迷信を否定するに足る。

〔第二類發音〕四九八九番の電話は(四苦八苦)と發音相通ずる故に之を嫌ふも、鰻屋が之を(ヨクヤク)として歡ぶ類、其他四十二は(死に)、十九は(十苦)に通ずる故に之を厄年と稱するも、死亡統計(大正二年)を見るに、何等大差なし。

男	四十一歳の死亡數	三三二、三六七人
	四十二歳　同	二九〇、六〇四人
	四十三歳　同	二六八、九六二人
女	十八歳の死亡數	四七八、六八〇人
	十九歳　同	四六七、六五一人
	二十歳　同	四五四、一六六人

兎も角人は何時も厄年の如く身を愼むべし。

大鳥は(大取)、又酉の日は(取りの日)として歡ぶも、利己主義の發表に外ならず。

〔第三類傳説〕鬼門の方角、友引の葬式、四目十目又は火性と水性の結婚を忌む類は、科學的根柢なし。例之ば寅を鬼門とするは、角ある牛と、力ある虎を結付くると、鬼を想像し得るが爲めのみ。

故に鬼門に建築して榮え、友引に葬式を出しても死人相續かず、四目十目の結婚なりしも、樂しき家庭を作る事實、特に鬼門は地球の南半面を研究せん

か、是等迷信の無意義なるを悟り得べし。

【第四類聯想】寅の千里歸るを想像し、此日結婚を忌み、丑は鈍き動物なるを認定し、此日著手せし裁縫は長引くとか。又西洋にても、十三の數及金曜日を嫌ふ類、其他合性も皆之に屬す。

併し合性の緣起を言はゞ西洋に離婚者少く、迷信の支配を受くる社會に離婚者、又は不幸の人多きを立證し、或は勉强せんか丑の日の裁縫にても、出來上ること速なる事實を示し、以て迷信を去るべし。又水曜日に雨が多いと言ふ類も、一年間の統計を示さんか其虚妄を明にするを得ん。

倘熊手は（かき集め）或は（かき取るの符號）として緣起よしとするも、全く兒戲に等し。

【第五類方便】愚夫愚婦の敎訓に利用せし迷信多し例之ば燧火を打ち、鹽を蒔く類は、消毒を意味し。箒を跨ぐと、云々の類は、躾と愼みの爲め、土用に鰻は、滋養の爲めなるも、文明の醫術を輕んじ、又人の勇氣を挫く類の迷信は不可なり。否方便よりも正道を以て敎訓するこそ文明式と言ふべけれ。

例之ば家相の如きも、光線空氣及高燥等の原理より、科學的に考ふべし。最早今日は方便を以て敎ふべき時代にあらず。

【第六類曲解】原因にあらざるものを、原因とする附會の説は信ずるに足らず、例之ば我姓名の字劃を氣にする者あるも、之を羅馬字又は假名字にて記すことを假定し、或は同姓同名者の運命を比較せんか安心し得べし、又九星相同じきも、其運命相異るは宿命的關係なきの證なり。

【第七類邪敎】正しき宗敎を信ずるは眞に嘉みすべきも萬物の長たる我身を忘れて、下等の動物植物等を崇拜し、恐怖し、又之に依賴する如きは、邪敎の常なり、即ち迷信の爲め腐敗したる水を飮んで病を得たる實例あり。要するに、誠の道にかなひなば祈らすとても神や守るべきを以て、濫に迷の心を起すべからす。即ち人事を盡して天命を待つべし。

迷信の結論。總て科學的或は哲學的實證の價値な

き妄想は迷信なり。一朝迷信に囚はれんか、恰も「アルコホル」の中毒に罹るが如く容易に解脱し難し。故に迷信の煩累を免るゝ者は幸福なり。

會報

○本會六月例會

六月九日午後一時より本郷區湯島高等女學校附屬作樂館に於て例會を開く、來會者數十名、醫學士中山敏樹氏は「家庭に於ける疾病及び健康上の注意」といふ題にて健康維持、並びに家庭に病人を生じたる場合に於ける平素心得置くべき家庭衞生上の注意を懇切に説かれ、次に法學士山田準次郎氏は最近歐米諸國巡遊中の觀察に依り外國婦人と本邦婦人との思想を比較し特にその知識及び體力の優劣を述べて日本婦人の大に覺悟する所なかるべからざる事を力説せられたり。散會したるは四時過なりき。因に當日出席の本會役員姓名左の如し。

濱尾作子　鳩山春子　長谷川竹子
岡田德子　高木鎌子　服部繁子
緒方悅子　小川孝子　田村きよ子
山口貞子　天野多喜子　菊池峯子
宮本樂子　（以上いろは順）

○新潟支會地久節祝賀會

新潟婦人衞生會は新潟婦人協會及び新潟婦人教育會と合同し同市白山公園偕樂館に於て六月二十五日地久節祝賀會を開きたり。新潟婦人教育會々長高田セン子開會の辭を述べ會員一同君が代を合唱し次で來賓江口師範學校長の演説あり、晝食後餘興に移り琴尺八合奏、會員の手品其他種々の催しありて盛會裡に午後三時閉會せり。

○收支決算報告（自大正七年三月 至同　八年二月）

收入

一金四千七百參拾六圓九拾八錢五厘

内譯

金參千貳百五拾六圓八拾壹錢五厘　前年度越高
金壹千貳百六拾貳圓四拾九錢　會費
金貳拾八圓　寄附及廣告料
金壹圓八拾五錢　雜收入
金百八拾七圓八拾參錢　預金利子

支出

一金壹千四百七圓七拾九錢五厘

内譯

金四百拾貳圓六拾五錢	報酬
金參圓五拾五錢	備品費
金五百九拾貳圓七拾四錢	圖書及印刷費
金七圓四拾貳錢五厘	筆墨文具費
金百七圓八拾參錢	通信運搬費
金八拾圓拾錢	集會費
金貳拾參圓五拾錢	雜費
金百八拾圓	借家料

收支差引殘

一金參千參百貳拾九圓拾九錢

内譯

金參千圓	川崎銀行預金
金五拾六圓四拾六錢	貯蔵銀行預金
金六拾圓五拾錢	振替貯金
金五拾圓	借家敷金
金百六拾貳圓貳拾參錢	現金

私立大日本婦人衛生會

○入會

○小川孝子紹介

牛込區簞笥町四二	特別會員	手島米子
麹町區三番町七六	特別會員	三家久子

○新潟支會

特別會員	太田たみえ子
同	淺利勝代子
同	伊藤如月子
通常會員	秋山ヤス子

以上

○寄附

一金五百圓也　篤志者

私立大日本婦人衛生會役員氏名

總裁　東伏見宮妃周子殿下
會長　侯爵夫人　鍋島榮子
副會長　男爵夫人　濱尾作子

（いろは順）

幹事　鳩山春子
同　岡田德子
同　山本多穗子
同　松平芳子
評議員　入澤常子
同　濱田捨子
同　原みつ子
同　西升子
同　緒方悦子
同　小川孝子
同　片山龜子
同　丹波貞子
同　田村きよ子
同　男爵夫人　南部限子
同　山口貞子
同　古市幸子
同　近藤籠子
同　岸澄子
同　三宅藤子
同　守屋千代子

同　長谷川仲子
同　高木鎌子
同　三浦敎子
同　羽田三緒子
同　服部繁子
同　仁禮壽賀子
同　土肥多越子
同　岡山とし子
同　男爵母堂　加藤鈴子
同　吉岡彌生子
同　高橋孝子
同　鶴原誠子
同　中濱芳子
同　子爵母堂　松井正子
同　小松いさ子
同　天野多喜子
同　菊池米子
同　宮本樂子

大正八年七月十七日印刷
大正八年七月二十日發行

東京市本鄉區駒込千駄木町五十八番地
編輯者兼發行者　莊司秋次郎

東京市本鄉區駒込林町百七十二番地
印刷者　櫻井新三郎

東京市本鄉區駒込林町百七十二番地
印刷所　合資會社　杏林舍

東京市本鄉區駒込千駄木町五十番地
發行所　私立大日本婦人衛生會事務所
（振替東京一〇六〇〇番）

賣捌所
東京市本鄉區龍岡町　吐鳳堂
同市銀座四丁目　東海堂
同市京橋區鎗屋町　眞明堂
同市本鄉區本富士町　明文館
同市同區春木町　南江堂支店
京都市寺町二條南入　若林茂一郎
東京日本橋區吳服町　北隆館
同市神田區表神保町　東京堂
同市本鄉區本富士町　盛春堂
名古屋市榮町六丁目　丸善書店